さすぎるのである。

妻の貞操について、日本の女性は、女學校時代から、懇々として教へられてゐる。が、日本の男性は、良人の貞操といふことについて、小學校時代から大學を通じて、一言も教へられてゐないのだ。性道德については、一言も教へられないのだ。たゞ品行を方正にしろといつたやうな、抽象的な訓言を受ける丈なのだ。良人の貞操といふことについて、もう少ししつかりした觀念を植ゑ付けられてもいゝのではないかと、自分は思つてゐる。

家庭は妻の城郭

家庭の主權は、むろん良人に在る。しかし、良人は欣んで、これを妻に代行さすべきである。或る家庭では、妻が殆ど召使と同樣な位置にゐる場合さへある。妻は、良人に對して、頭が上らず、良人の兩親に對しても頭が上らず、良人の弟妹に對してさへ頭が上らない場合すらある。

私は、凡ての家庭は、良人の主權を代行する妻が、中心となることが、一番正しいと思ふ。社會的に活躍してゐる良人は、家事上のことは、妻に一任すべきであつて、臺所のことにまで、口出しをするやうな良人は、最惡な良人の一人だと思ふ。

良人が、妻を愛し、妻を尊敬し、妻に主權を代行させるやうにすれば、良人の兩親も弟妹も、自然に主婦を中心に、生活するやうになつて行くのだ。それが、圓滿に治まれる一家の姿だと思ふ。もし、それに反對するやうな家族がゐたとすれば、その家族は、どこか性質が、曲つてゐるのだ。

また、それで圓滿に行かないやうな場合は、夫婦丈別居すればいゝのである。萬一の場合には別居する覺悟がなければ、その妻と結婚しなければいゝのである。姑との折合や、家族との折合が惡いために、妻が離別されるのは、日本丈であらう。それは、あまりに妻の人格を無視し、妻を召使扱ひにし、一家の機關扱ひにし、結婚といふことの意義を、理解してゐないのである。

夫婦といふ關係は、親子關係、兄弟關係とも對立し得る人倫の大道である。

姑と妻とが仲が惡いために、妻を離別するよりも、妻と二人で別居した方が、人間として遙か

に立派であると思ふ。

とにかく、家庭に於ける妻の位置は、現在よりも、もつと〳〵重視されてい〻のである。姑はともかく、小姑などに、いびられてゐる妻の場合など、それは彼女の良人が、いかに意氣地がないかを、示してゐると思ふ。

とにかく、良人は家庭以外に、活躍する天地も廣いし、慰安を取る場所もあるが、妻にとつては家庭が、彼女の天地である。家庭に於て丈でも、妻を威張らして置き、妻をのび〳〵とさせて置くことは、良人の妻に對する第一の責任でもあるし、愛情でもあると思ふ。

妻に主權を代行させるといふことは、良人が、その收入を全部妻に渡すことが、第一歩である。妻が、良人の收入を保管し、姑の費用も弟妹の費用も、全部妻の手から渡されるやうになると、彼女の位置は、家庭に於て、自然强固となり、有力となるわけである。

尤も、かうして妻が、一家の眞の意味の主婦になるためには、妻が人格的にも、學問的にも、相當立派でなければならない。經濟的手腕も必要だ。しかし、日本の家庭に於ける妻の位置が、向上し、尊敬されるに從つて、結婚せんとする子女も、それ丈の覺悟を以て、教養に努めるだら

うと思ふ。

とにかく、世の良人たるものは、家庭に於ける妻を、もつとよく尊敬し、欣んでその主權を代行させ、あらゆる家庭を妻本位の家庭たらしむべきだと思ふ。

姑問題なども、良人に確固たる決心があれば、圓滿に解決するのではないかと思ふ。

家庭は、妻にとつては城郭だ。少くとも、その城郭の中には、妻にとつて不快なもの、妻にとつて望ましくないものは、存在させてはならないと思ふ。さうすることは妻に對する良人の重大な責任であり、義務であると思ふ。

良人の惡德・惡癖

家庭の神聖を汚す良人

良人の惡癖もいろ〳〵あるが、その中で最も甚しいのは、家庭の神聖を汚す良人であらうと思ふ。家庭の神聖を汚すと云ふのは、つまり家庭内で妻以外の女性と關係する良人である。家庭内に於ける妻以外の女性と云へば、妻の姉妹（主に妹）、寄宿してゐる女性であり、女中である。殊に、女中と關係する良人は、數限りなくあるやうである。

凡そ、家庭は、妻にとつてたつた一つの世界であり、妻の本壘であり、妻にとつて身を安んずるたつた一つの城郭である。この妻の本壘で妻を侮辱するのであるから、妻にとつて、これよりも大きい痛苦はあるまい。

殊に、人妻としての最大の悲劇は、良人が、自分の庇護の下にある妹と關係した場合であらう。

妹が、嫁いでゐる姉の許にゐる場合は、實家が零落したために、姉の許へ手傳ひ代りに寄食してゐるか、姉が都會にゐるために、妹が學問をするため、行儀を見習ふために來てゐるか、でなかつたら、姉が病氣するか、若しくは姙娠したため、遊んでゐる妹が手傳ひに來てゐるかである。

いづれの場合でも、姉である人妻は妹を保護しなければならぬ充分の責任があるわけだ。自分が保護しなければならぬ妹、自分が愛してゐる肉親の妹、その妹が、自分の信頼してゐる良人と、道ならぬ關係をしたとすれば、姉の身にとつては、天地が轉倒したやうな衝撃を受けるだらう。

が、この惡事を働く良人は世の中に必ずしも稀ではないのだ。

殊に、姉が病氣するか、姙娠した場合に、妹が手傳ひに來る例は極めて多い。こんな場合、良人は止むを得ず禁慾してゐるために、性的な衝動が強くなつてゐるのだ。それが自分の目先にちらちらする、妻に似て、しかも妻よりは、若く水々しい妹の肉體に向ふのは甚だありがちである。尤も、少しでも德義を解する人間ならば、そんな衝動を抑制する位は、何でもないのだが、世の中にはダラシのない人間が、可なり多いのだ。妹が自分の妻の肉體の分身か何かのやうに、身勝手な錯覺を起して、妹に働きかけるのだ。

妹の方から云つても、外ならぬ姉の良人である丈に、信頼し親しんでゐる丈に、つい氣をゆるし易いのだ。不德な良人は、さうした妹の油斷や隙に乘ずるのである。

「身上相談」などを引受けてゐると、かうした過ちを犯した妹の告白に、いくらでも接することが出來るのだ。

こんな場合に、最も苦しい立場に置かれるのは、妻である姉だ。自分の良人を奪つた、憎むべき相手は、いとしい肉親の妹である。憎まうとしても憎み切れない位、苦しいことはないだらう。かういふ苦しみを地獄の苦しみと云ふのだ。(人妻地獄)とも云ふものがあつたならば、良人

が自分の妹と關係した妻の苦しみと云ふのは、その中でも、最も悲慘な地獄の一つであらう。

つまり、その場合妻は、良人を奪はれると同時に、親愛なる妹も、奪はれるのだ。世の中で自分の最も親しいものが、同時に二人、自分から背いて行くわけだ。

良人が、妻以外の女性と關係することは、悲しむべき惡德である。が、その中でも、肉親の姉妹と關係することは最も怖るべき惡德である。妻は、自分を裏切つた良人のために、苦しみ悶えながら、自分を裏切つた妹の始末をしなければならないのだ。その罪を責めてから、家庭から放逐すべき相手は、最愛の妹なのだ。

こんな目に遭つた人妻は、氣が狂はなければ病氣になるだらう。その上、妹の中には、折には大それた女性もあつて、姉の良人を奪つておきながら、あべこべに、姉を追ひ出さうと企む者もないとは云へないのだ。

しかし、大抵の場合に、責任は良人にあるのだ。妹の方で、姉の良人を誘惑する場合などは、千に一つもあり得ないのだ。大抵は、姉の良人が惡いのである。

世の良人たるものは、自分が惡魔になるつもりがなければ、妻の肉親などに、その好色の眼を

向けてはならないのだ。良人の第一の惡德として、愼んだ上にも、愼むべきだと思ふ。

その次は、寄食したり、間借してゐる女性と關係することだ。これも、家庭の神聖を汚すと云ふ意味で、絶對にしてはいけない。それは、マザ〳〵と妻の周圍を騷がし、妻の面目を潰し、妻の根據地を擾すからである。

が、寄食してゐる女性との關係よりも、もつと性質の惡いのは召使の女性に手を出すことだ。

これも、妻の面目を踏み躙る點に於て、怪しからないことである。しかし、この惡德を犯す良人は、世の中に限りない。しかも、財産や位置のある良人に多いのだ。第一、相當の身分でない女中を置いてゐないのだ。それに、家が狹いと、女中は常に妻の監視の下にある。だから、中流階級以下の良人には、かうした惡德は稀である。

が、女中が二三人もをり、十間以上もある家の主人には、かうした許すべからざる惡德を、屢屢犯すものが頗る多いのである。

それを古來、大した罪惡とも思つてゐない人が多いのは、最も嘆かはしいことだと思ふ。

私は、女中など〻關係するのは、良人の中の屑だと思ふ。又、好色家の中でも、女中を相手に

するのなどは、最も下等にして、且つ不德な惡趣味だと思つてゐる。

家庭に於て、女中は、妻に附屬するものだ。妻の統制下にあるものだ。それを、妻の目を盜んで襲ふのであるから、妻の面目を潰すことに於ても、これ以上の潰し方は澤山ないと思ふ。

又、女中その人に對しても、怪しからないことだ。良家に奉公に來る女中などは、大抵は農村の子女で眞面目な娘が多いのである。家計を助けるためと、家事、行儀見習などの意味もあるのである。

一家の主人は、これを庇護し、善導することが、その責任でなければならないのである。

それだのに、主人たる位置を利用し、主人としての命令權を惡用して、その處女を奪ふが如きは、天人共に容れざる罪惡であらう。

しかし、相當の資産、位置のある人で、かうした惡癖を持つてゐる人は、可なり多いやうだ。昔の大名や、權力者が、召使の女性を、いつでも自分の思ふま〻にしたやうな惡風が、今でも殘つてゐて、それを大した罪惡だとは思はないのである。

現在、懸案中の刑法改正では、雇傭關係を利用して婦女を犯したる者は、嚴罰に處せられる法

文が、設けられるといふ話であるが、それは甚だ當然のことで、さうした改正が考へられてゐる點を考へても、現在女中の被害が、いかに多いかゞ分ると思ふ。

一家の權利者である主人が、女中などに野心を持ち、その機會を作らうとすれば、その機會はいくらでもある。殊に、廣大な邸宅に於てはさうである。女中は、まるで虎の前の小羊のやうな位置に置かれてゐるのだ。寢室へ呼んで、肩を叩かせ、足をもませることだつて、出來るのである。しかし、かうした特權を利用して、相手を襲擊するが如き、卑怯中の卑怯である。いやしくも、男子たる者の爲すべきことではないのだ。

その上、本當の愛情を持つてゐる場合など、萬に一つもなく、多くはたゞ一時の慾望のためである。たゞ、一時の慾望のために、一人の女性を臺なしにしてしまふのである。

そのことさへ、非常の罪惡であるのに、それを妻の、直ぐ背後で行ふのであるから、良人としての惡德中、第一に位するものであるかも知れない。

女中などに構ふ位なら、家庭外で浮氣をした方が、人間としてもいくら上等かも知れないし、妻を傷ける程度も、ずつと輕いと思ふ。

いづれにしても、女中さん丈は、禁物である。良人として、爲すまじき事の最大戒律であると思ふ。

妻以外の素人女と關係すること

家庭の神聖を汚すのは、一番いけないが、それに續いて愼むべきことは、妻以外の素人の女性と關係することである。

素人の女性との關係は、何うしても戀愛關係になりやすいのだ。物質丈で、身を委す素人の女性などは、滅多にゐるものではない。何うしても、戀愛關係になつて深入りするのだ。かうなれば、妻に對する最大の脅威である。そして、素人である以上、結婚せんことを欲し、同棲することを望むやうになるものだ。妻に對して、恐ろしき競爭者となるのだ。藝妓とか女給とかは、その周圍に常に、四五人の男性があつて、目まぐるしく動いてゐるから、唯一人の男性に對しては

夢中になる場合が少いのだ。しかし、素人の女性は、たつた一人の男性に、驀進して來るのだ。その上、(後ぐされがする)といふ言葉がある通り、その關係も、容易に斷つことが出來ないものだ。

藝妓や女給などは、その男が少し足を遠くすれば、きつと競爭の客が、しげ〳〵通つて來るので、女の關心は、後のお客の方へ、いつの間にか向いてゐるから、その機會を利用して、別れ話も出來るのである。しかし、素人の場合は、さう簡單に、身を退くことなど、絶對に出來ないのだ。相手は、ムキで眞劍なのだ。さういふわけで、素人と關係する場合は、相手が純眞であればあるほど、可なり冒險を伴ふ火遊びである。

まかり間違へば、自分の生活に——妻との結婚生活に、異變を生ずる危險も多いのである。

良人たる者は、愼みて愼むべきことだ。

女給、藝妓、娼妓などゝの遊蕩

前の二つに比べれば、道德的には罪はやゝ輕いかも知れないが、結婚生活に對する一大脅威たる點では、大同小異のものに、女給、藝妓、娼妓などとの遊蕩がある。

女給、藝妓の中にも、眞劍な戀愛をする女性も澤山ゐるし、結婚を望み、同棲を欲する女性も多いから、妻との結婚生活の脅威である場合も多いのである。

が、さういふ脅威とならない場合でも、それから起る經濟的な濫費は、結婚生活を脅かすのに、充分なのだ。カフエーでも待合でも、先立つものは金である。カフエーでもバーでも、女給の歡心を得ようとすれば、一回十圓以上、使はなければならぬ。金離れをよくすることは、かういふ所で、相手の關心を得る最大の祕訣である。ケチ〳〵してゐたのでは、女給など寄り付くものではない。

酒も相當飲まなければならない。女給達にも、物を食べさせてやらなければならない。女給達は、自分の賣上げ高を多くすることが大切なのである。だから、行く度に、相當の賣上げを作つてやると同時に、歸りのチップも、はずまなければならない。

その上、カフエーや、バーでの遊びは、何うしても、張り合ひになり易いのだ。一人の美しい

女給の所へは、四五人は野心のあるお客が通つてゐるものだ。しかも、そんな連中が、屢〻同じ時刻に、落ち合ふものである。外の卓で、競爭者がやつてゐる行動が、ハツキリ分るのだ。此方も、負けないためには、それ以上の豪遊をすることになるのだ。

だから、相手の女給を、自分のものにするためには、相當の張り合ひ競り合ひをしなければならないのだ。

藝娼妓に至つては、一時間いくらと金のかゝるものである。だから、かういふ遊びを覺えることは、妻との愛情生活には、たとひ影響がないとしても、金錢の浪費に依つて、家庭生活を經濟的に滅茶々々にし易いのだ。

家庭が經濟的に破綻することは、やがて愛情的にも破綻する前兆である。

家庭の娯樂費、慰安費、甚しきは、生活費までが、バーや待合で使はれるやうになつたら、家庭生活も結婚生活も、既に末路にありと云つても過言ではない。

妻に暴力を加へること

良人の惡德のうち、最も甚しきものは、前に掲げた、性的なものだが、それ以外にも、いろいろな惡德がある。それを次ぎ〳〵に列擧して見よう。

凡そ、文明が進歩すればするほど、暴力は忌避せらるゝものである。殊に、婦女に對して暴力を行使することは、男子の最大惡德の一つである。

英國のゴールズワアジイの戯曲に、「正義」といふのがあるが、それは青年が、人妻が良人から暴力を加へられるのを見て、義憤を感じ、その人妻を救つたことから、却つて自分が罪を犯す、といふ筋であつた。婦人が男性から、暴力を加へられる姿は、文明人として、見るに堪へざる光景である。が、しかし、日本では、平然として妻を毆つたり、蹴つたり、甚しきは髪を捕へて引きずり廻したりする良人が、今も尚ほ跡を絶たないのである。

凡そ、自分より力の弱い者に對して、暴力を加へることは男子として甚だ卑怯な振舞である。まして、自分が庇護しなければならぬ女性に、暴力を加へる如きは、沙汰の限りである。(夫婦喧嘩は犬も食はぬ)といふ諺は、夫婦喧嘩のいかに馬鹿々々しきかを、示してゐると同時に、良人が妻を毆打することは、犬も面を背けるほどの醜體だといふ意味も、あると思はれる。

殊に、良人が暴力に訴へる場合は、大抵は、自分の方が、理窟に負けた鬱憤のやり場に困つての亂暴沙汰である場合が、多いのだ。

いかなる場合にも、女性としての妻を劬り、妻に敬意を失はないことは、男性としてのたしなみである。他人を尊敬することは、自分を尊敬することだ。妻を侮辱しないことは、自分を侮辱しないことだ。妻を辱めるのは、自分自身を辱めてゐることだ。

妻を毆つたり蹴つたりすることは、妻の自分に對する愛情の芽を枯らし、妻をこじれさし、妻をひねくれさして、結局、夫婦愛の根源を枯らしてしまふことになるのだ。

その上、妻に暴力を振つたりすると、ついそれが面白くなるのだ。變態性慾の一種に、淫虐性といふのがある。相手の異性を苦しめて、それで性的快感を得る病氣である。妻を毆つたり、蹴

つたりしてゐると、それがいつの間にかサヂズム的傾向になつてしまつて、いよ〳〵激しくなつて行くのだ。世の中には、よく殺すぞ、殺せ、といつた大喧嘩をする夫婦がある。こんなのは、恐らく半ば以上、これに取り憑かれてゐる良人である。

妻に一指も加へないといふことは、良人の一生のたしなみであつてよい。妻の人格を尊敬することは、結局、自分の人格を自ら尊敬することなのである。

妻を子供扱ひにするな

妻を愛し、庇護することは、良人の義務である。しかし、それはあくまで、妻の人格を認め、妻の位置を尊敬してからでなければ、駄目である。

妻の人格の獨立を認めないで、猫可愛がりに、人形扱ひにしてはならないのである。さういふ愛し方は、きつとある時期が來れば、破綻を生ずるのである。

良人たるものは、常に自分の仕事の現在、將來の計畫、自分の資産の狀態……もしくは窮乏の狀態について、妻に知らしておくべきである。芝居の中の明智光秀は、(女童の知ることでない)と、云つてゐるし、忠臣藏の義士の中には、復讐の大事を妻に打ち開けなかつた人もゐるやうだ。しかし、聖代に生れたありがたさには、妻に打ち開けられないやうな祕事を、我々は計畫する必要は少しもないのだ。大抵の計畫に關心を持たしめた方が、妻として、どんなに嬉しいか分らないだらう。

尤も、現在に於ても、軍籍にある人々は、妻といへども軍機上の事は、語るべきでないことは、勿論であらう。それ以外は、妻に祕密にしなければならぬ事が、あり得る筈はないし、あればいけないことに定まつてゐる。

妻をあまりに人形扱ひにし、妻に何等の責任をも持たしめなかつた爲に、妻が「人形のやうに扱はれるのは澤山だ！」と云つて家を飛び出したのは、イブセンの「人形の家」のノラである。

妻を子供扱ひする人は、妻の人格を認めてゐない人である。妻を愛撫するだけでは駄目である、妻の人格をも、尊重しなければいけないのである。妻を、一人前の人間として尊重すること

が、大切である。夫婦別ありとか、親しき中にも禮儀ありといつた意味である。性的に愛するばかりでなく、靈的に愛さなければならないのだ。妻の肉體を愛するばかりでなく、その精神を愛さなければならないのである。

ある男が、妻にダイヤモンドの指輪をねだられて、模造品を買つて與へて置いた。妻は欣んで、それを指に入れてゐた。かういふことは、家庭小話としては、笑へないのである。

こんなひどいことをする良人は、滅多にゐないだらうが、表面丈で、妻を愛してゐるやうな態度を示してゐるなども、これと同じである。愛情の模造品で、妻をごまかしてはならないのである。

夫妻の愛情に、ごまかしやインチキがあつてはならないのである。さういふものが、妻に依つて發見された場合、妻は大なる幻滅を感じて、それが夫婦の一生の間の罅になるかも知れないのである。

尤も、多くの妻の中には、妻が性格的に發達してゐず、一人前の人間として扱へない場合もある。いつまで經つても子供であつたり、何處か足りなかつたり、どうしても大事な仕事を委した

り、話したり出來ない場合もある。

しかし、さういふ場合も、良人は出來る丈、妻を教育し、妻を啓蒙して、一人前の女性に、仕立てあぐべきであらうと思ふ。妻が性格的に、子供だからといつて、いつまでも、妻を子供扱ひにしてはならないと思ふ。

家事に干渉する良人

些事に、小うるさい良人は、妻に取つて苦手であらうが、その中でも家事、殊に臺所方面に、口出しをされることは妻にとつて、不愉快なことであらうと思ふ。

月給袋を、そのまゝ妻に渡し、その中から、自分の小遣を改めて貰ふ人は、經濟的には、理想の良人であらう。

月給の中から、一定の家政費を、妻に手渡してくれるのは、それに次いで善い良人であらう。

家政費を請求するまゝに渡してくれる良人は、その次ぎであらう。が、一番いけない良人は、家政費の支出を一々點檢し、口小言を云ふ良人であらう。それより、もつと不可ないのは臺所に出て來て、凡ての買物について、一々小言を云つたり批評したりする良人であらう。

尤も、世の中にはダラシのない妻があり、家政の切り盛りが下手で常に冗費が嵩み、そのために家庭經濟が赤字になるやうな場合は、良人が止むを得ず、家事に干渉し始めるのは、これは止むを得ないことで、これは良人が悪いのではない。

然らざる場合に、良人が一々干渉して、一々の買物にまで、口出しをされては、妻としては不愉快千萬であらう。人間の生きて行く一つの樂しみは、仕事である。たとひ、喰ふに困らないでも、仕事がなければ、人生は索莫たるものになるであらう。

妻にとつての仕事は、家事である。自分の考へやプランに依つて、家事を切り盛りして、良人に滿足を與へると共に、家政費の中から、少しでも自分のへそくりのお金でも溜めようといふのが、家庭といふ天地に生きる妻に、與へられてゐる唯一の仕事であらう。

その仕事が、たとひ良人とはいへ、人の干渉を受けて、自分の思ひ通りにやれないとすると、

妻は唯一の仕事、唯一の生甲斐を奪はれることになつて、少しでも自尊心のある女性ならば、そのために、不愉快な毎日を過さなければならなくなるのだ。

その意味で、他の點では申分ない良人でも、臺所に干渉する良人は、良人として、大きい缺陷を持つ人だと云つてもよいと思ふ。

妻に、家事をさへ委せられない良人は、小心であるか、偏狹であるか、卑吝であるか、とにかく明朗寛大な良人でないと丈は、たしかである。

良人たるものは、たとひ、どんなに家庭生活が苦しくつても、家事殊に臺所丈は、妻に一任して、口出しをしないことが、良人たる者の一つの美德ではないかと思ふ。

他人の前で妻を叱るな

私の知人に、とても神經的に潔癖な人がゐる。俗に云ふかんしやうで、一寸した不潔でも堪へ

られない。家の中に、蠅が一疋とんでゐても、もう我慢が出來ないのである。往來を通る時、通りすがりに人が唾を吐いたりすると、その唾が衣服にかゝつたやうな氣がし、家に歸ると、消毒せずにはゐられないといふ人である。從つて、連れ添ふ細君に對する口小言は、大變であらうと想像される。この人は、夫婦ぎりで九十圓といふ高い家賃の家に住まつてゐる。

僕が、(なぜ女中さんを傭はないのか)といつて聞いたら、女房が、貴方に叱られても、二人ぎりなら辛抱出來るが、女中さんの前で叱られたら堪らないからと云ふのでと、彼は答へた。

人前で、叱られるといふことは、誰でも不愉快なことである。殊に、妻としては目下で、自分が小言を云はなければならぬ女中さんの前で、叱られたりすることは、何よりもいやな事に違ひない。

ところが僕が先日聞いた話に、或る辯護士は、その奥さんを叱る時は、書生や女中を呼び集めて、その前で叱るさうである。

むろん、公衆の前で、叱つた方が、その相手に耻を與へる點では效果的である。その意味で、昔の刑罰は公衆の面前で、執行された。しかし、世の中で最も親しかるべき夫婦の仲で、妻を叱

るのに、妻により多く耻を與へるために、女中さんの前で叱つたりするのは論外である。

かういふ場合は、聞いてゐる女中さんだつて、堪らないだらう。

たとひ、夫妻間で、口小言を云ふ場合でも、二人ぎりで云ふのが妻に對する當然の禮儀であり、自分自身に對する禮儀でもある。

（客の前では、猫も叱るな！）といふ言葉がある。それは、客に對して失禮に當るからだ。まして、第三者の前で、大切な妻を叱るなどは、第三者に對して、大きな失禮である。夫婦喧嘩は、犬も喰はぬと云ふが、第三者の前で、妻を叱つたりするのは、第三者に犬も喰はないやうなみつともないものを強ひて喰べさせてゐるのである。

飲酒癖も悪德の一つ

酒を飲むことは、程度問題である。一合二合の酒を飲むことや、また澤山飲んでも、亂れない

人は、それを悪德に數へることは出來ぬ。しかし妻にとつては、酒を飲む良人よりも、飲まぬ良人の方が好ましいのに定つてゐる。

昔から（飲む、打つ、買ふ）を、男性の三つの悪德に數へてゐる。この中で、（打つ、買ふ）の二つは程度に依らず悪德である。しかし、飲むの方は、程度の問題である。

しかし、ある程度を越した飲酒は、もう悪德に數へてもいゝと思ふ。

殊に、毎日會社が退けた後、バーかカフェーで、一杯やらねば家へ歸らぬ良人などは、妻にとつて不斷の心配の種であらう。

妻を相手としての一二合の晩酌、月に一二回の宴會に於ての飲酒などは許されてもいゝ方だ。が、昔の言葉で云へば（茶屋酒）、今で云へば、バー、カフェーの常連になつては、飲酒そのものが立派な悪德である。

飲酒は、それ自身不經濟であり、且つ不健康である。と同時に、他のいろ〳〵な罪悪に繋がつてゐるのだ。殊に、飲酒の向う側には、常に女性がある場合が多いのだ。

酒は、美女のお酌でなければうまくないと、昔から云はれる。女給相手の酒、藝妓相手の酒と

なると、家庭生活にとつて、大なる危機を孕むのだ。

酒の勢に依つて素面で行かれないやうな不潔な場所へも近づくのだ。殊に、酒は友達がなければうまくない。

類は友を呼ぶ、酒友同志の交際が始まる。今日は、早く家へ歸らうと思つてゐると、友達が誘ふ。明日は、早く歸らうと思つてゐる友達を、自分が誘ふ。誘ひつ誘はれつ、酒を飲む回數が月月に殖えて行くのだ。

田舍の生活では、酒を飲む良人でも飲む場所が少いために、案外飲酒癖が昂進せずに了るだらう。が、都會では、男子到る處酒あり、酒ある處女ありで、少し意志の薄弱な男性だと月給の全部でも、飲みかねないのである。その中には、馴染のバーが出來て、月末勘定にしてくれる。さうなると、金のない時でも飲むやうになつて、ボーナスまでも、借金に割當てられて、妻のためには、羽織一枚も買つてくれないやうになつてしまふのだ。

尤も、お酒丈の良人は、まだ妻として辛抱が出來るが、お酒と同時に、女ぐせの惡い良人は、この二つの惡癖がお互ひに刺戟し合つて、兩方ともいよ〳〵嵩じてしまふのだ。

救世軍の歌のやうに、遂に酒が、その人の生活、いとしき妻子までも、飲んでしまふ場合だつてあり得るのだ。

男子として、酒好きの人は、それを止めろと云つても、無理であるが、自分の收入に比例し、又家庭生活の平和を亂さない範圍で、酒を飲むべきものではないかと思ふ。

妻の幸福や希望まで、飲んでしまつてはならないと思ふのだ。

賭博、競馬、株に耽る良人

賭博に耽る良人も、又困りものだらう。しかし、本當の賭博に耽る人などは、ごく少數で、この書の讀者の方には、さうした人を良人としてゐる方は、ごく稀であらう。が、競馬に耽ける人は、澤山ゐるかも知れない。競馬は、政府が軍事や産業に必要なる馬の生産を奬勵保護するために、許してゐる事で、國家的には必要な施設である。そして、馬券を買ふことは、賽を振るの

とは違つて、偶然の機會で勝敗が定るのではないから、賭博ではないのである。

本當に馬が分る人は、損をしないで濟むかも知れないのである。しかし、それが、至難な事なのである。株式も亦、賭博ではない。いろいろな經濟界の事情がよく分れば、賣買して儲かるかも知れないのである。しかし、國内ばかりでなく世界的の影響を受ける株式の上り下りを、豫想することが、大變な難しさである。しかし、株式は上るか下るかの二つである。それでも、鑑定が難しいのである。まして、競馬は十頭以上、二十數頭出てゐるのである。その中で、三着までに、どの馬が來るかなどといふことは、容易に鑑定が付かないのである。

その上、馬券を買ふ度に、一割五分宛の手數料を、取られるのである。昨年も、日本全國での馬券の賣上高は、一億二千萬圓に上つた。さうすると、手數料丈でも千八百萬圓である。この金は、取られつぱなしになる金である。全國に競馬ファン一萬人ゐるとしたら、一年に一人千八百圓宛取られてゐるわけだ。三萬人ゐるとしても、一人六百圓取られてゐるわけだ。つまり、競馬をやるのには、一年百圓税金を取られてゐるのと同じである。これで、競馬をやつて儲かるわけはないのである。

競馬をやるために、お金などを工面して行けば、その人は身を亡すのに定つてゐるのだ。

たゞ競馬はなか〳〵樂しいものだ。自分が、勝つだらうと鑑定して、馬券を買つた馬が、十數頭の先頭を占めて、ゴールに突進して來る樂しみなどは、外では一寸見當らない。

だから、何に使つても惜しくないお小遣で、馬券を買ふ程度なら、差支へないことである。それに依つて、國家の馬產事業に協力することになるのだ。（競馬からの收入は、扶助事業の資金にもなつてゐる。）

だからお小遣で競馬をやれる人なら、行つても差支へないと思ふ。青空の下、清淨な空氣の中で、一日を暮すのだから、健康的であり、お茶屋での散財などに勝ること萬々である。

しかし、さう云ふ風にやることは、至難であつて、一度競馬に溺れ出すと、無理な金を工面して、損をし、その損を取り返すつもりで、更にヒドい工面をして、馬券を買ひ、遂には取り返しのつかない窮境に陷る人が多い。時々、新聞に競馬のために、身を亡した人の記事が載つてゐるのを見ても分る。

だから、少くとも月收三四百圓以上ある人で、しかも自制心のある人でなければ、競馬場へ出

入すべきでないと私は信じてゐる。

株式相場も同じ位、危險である。商賣で、株式に關係してゐる人々は、仕方がない。素人が、不充分な俄仕込みの知識などでは、相場に近づくべきではないと私は信じてゐる。一攫千金を夢見て、株に手を出し、一敗地に塗れた人が、どんなに多い事ぞ。私の所へ、身上相談の手紙をよとす不幸な女性達の手紙の過半には、

（父が相場に手を出して失敗しましたので）

と云ふ文句が、一家の沒落を語る冒頭を成してゐる。

職業的な相場師の妻は、結婚する時から、その覺悟であるし、良人の冒險的な生活と快樂勞苦を共にするのも亦、妻としての本懷であらう。私の知つてゐる相場師の夫人は、良人が景氣のいい時は、指頭に小石大のダイヤを輝かし、自家用の車で、出入してゐるが、良人が失敗すると、ダイヤは忽ち影をかくし、自動車は忽ち賣り拂はれ、身の廻りの物まで質に入れ、しかも平然として、慌てないで、良人の捲土重來を待つてゐる。かうなると、良人と一心同體になつてゐるわけで、妻としての生甲斐もあるだらう。

たゞ堅氣の商賣人とかサラリイマンが、一朝相場に夢中になつたりすると、その妻は忽ち生活の安定平和を破られるわけで、成功する場合は少く、失敗する場合が多いのだから、妻としては、やり切れないだらうと思ふ。

賭博、競馬、相場とも、いづれも危險の伴ふ投機である丈に、良人がそれに耽ることは、妻に不斷の不安を與へるばかりでなく、一朝失敗すると、その直接な被害者は妻である。さう云ふ意味で、これも良人たるものゝ惡德的行爲であると云つてもよいだらう。

趣味への耽溺

ゴルフ、麻雀、將棋、圍碁、魚釣などは、男性の趣味としては、健全に近いものである。しかし、それも程度問題である。あまりに、さういふものに、耽り過ぎると、そのために妻の幸福や平和を搔き亂し兼ねないものである。

外國には、ゴルフ後家といふ言葉がある。あまりに、ゴルフに夢中になつて、妻を放りぱなしにするために、出來た言葉である。折角の日曜なので、良人が今日こそ、家にゐてくれるだらうと思つてゐると、朝からゴルフである。そして、友人と晩飯を共にして、八時頃に歸つて來る。そして、疲れてゐるので、床には入ると、すぐグウ〳〵寢てしまふ。これでは、妻たるものはたまらないと思ふ。釣道樂なども、同じことが云へる。

又、麻雀なども、毎晩近所の麻雀クラブへ行つて、十二時近くでないと、歸つて來ない。かうなると、家庭不和の原因となり兼ない。圍碁、將棋なども同じことが云へる。圍碁も將棋も麻雀ほどは、時間がかゝらない。(碁將棋は親の死目に會へぬ)と云はれるが、現在では麻雀の方が、もつとその危險があるのではないか。

とにかく、かうした趣味は、趣味そのものは、惡い趣味ではない。しかし、そのために、家庭や妻を犧牲にしてはいけない。妻の幸福や平和を犧牲にするまでに、道樂が進むと、それはやはり良人の惡德の一つに數へられても仕方がないだらうと思ふ。

夫婦一體の心がけ

姑と良人

わが母——つまり妻にとつては姑と、妻との間に在る良人は、人生に於て、一つの困難な立場に在ると云つてもよい。

尤も、姑がよき人であるに從つて、その困難は緩和される。姑も人並以上によき人間であり、妻も人並以上によき人間である場合には、良人は兩者の間に立つて、少しの困難も感じないであらう。

が、わが母も、我には此上なきよき母であつても、妻に對しては別人の如く惡い場合が、非常に多いのである。

妻も、我にとつては良き妻であつても、姑にとつては、よき嫁でない場合が、非常に多いのである。

女性が二人集まつた生活と云ふものは、なか〳〵にうまく行かないものだ。女同志は、嫉妬も深ければ猜疑も深いのだ。

しかも、その二人が義理といふ止むを得ない關係で、姑と妻として、相對峙するのだから、ともすれば相反撥するのは當然である。

殊に、母一人男の子一人などの場合、自分一人の愛兒として、愛しつゞけて來たわが子の愛情の大部分が、新しい他人に持ち去られるのであるから、どんな母でも、嫉妬は感じないまでも、ある程度の寂しさを感ずるのは當然である。しかも、かうした母親に限つて、中年で良人に死別してゐるから、大抵はいくらかヒステリイ氣味になつてゐるのだ。

わが子は、此上もなく可愛いし、またわが子が妻を持つといふことも、人生の必然事として、

好ましい事と思ひ、また止むを得ざる事と思ひながらも、子の妻として、家庭には入つて來る新しい人間は、母親にとつては何うしてもどこかに闖入者といふ感じを與へずには置かないのだ。

尤も、心がけよき母親であれば、わが子を嫁に託して、わが能事了れりとして、晩年の安らけさを望んで、心からなる隱居生活に、は入つてしまふであらうが、しかし少しでも、生活意識があり、子に對する關心が殘り、家政に對して自信があつたりすると、何うしても自分の主婦としての位置を、固守したくなつたり、また主婦としての位置を、嫁に讓つて見たところで、それに對する未練が殘つて、嫁の家政方針に、何かと文句を云つて見たくなるのである。

かうなれば、家庭内が圓滿を缺き、折にふれ、事に連れて、風波が立ち騷ぐのである。

かうした場合に、姑と妻との間に立つ良人の立場は、可なり苦しいと同時に、その責任は甚だ重大である。

母に盡し過ぎれば、妻はねたゝまれなくなるし、と云つて妻に盡し過ぎれば、母の機嫌は、いよいよ險惡になるばかりだ。かういふ場合に、如何なる良人が一番いけないかと云へば、妻に對する母の不機嫌をよいことにして、いよ〳〵妻に冷淡になる良人である。

殊に、甚しいのは、妻に嫌氣がさしてゐる場合、母の不機嫌を口實にして、いよ〳〵妻に冷淡に振舞ふ良人である。そして、その結果、妻が離婚して去ることになれば、うまく自分自身の責任を回避しようといふのである。

かういふ良人は、良人の中で、最も頼もしからざる良人である。

然らば、最もよき良人は、どんな良人であらうか。それは、母の手前、現に妻に對して、冷淡に振舞ふが、しかし陰では、それを償ふために、更に深く妻を愛してくれる良人である。

現では、どんなに冷淡に振舞はれても、陰でさゝやいてくれる良人の愛の言葉は、妻にどんな辛抱をでも切り拔ける勇氣を着けてくれるだらうと思ふ。

姑の仕打が險惡になればなるほど、良人の陰での愛情が、增してくれば、妻はどんなにでも辛抱が出來るであらうと思ふ。

親子は、人倫の大道である。しかし、夫婦も亦人倫の大道である。どちらが大切であるか、容易に判斷することは出來ない。昔は、父母のために、妻を犧牲にすることは、何でもなかつた。父母の氣に入らない妻は、遠慮會釋なく離別した。それは、女性を男性より一段下の生物と見て

ゐた、封建時代の道德である。

今は、妻のために、親を犧牲にすることが不道德であるやうに、親のために妻を犧牲にすることも、また甚だ考ふべきことである。

しかし、こんなに、親が大事か、妻が大事かといふやうな切羽詰つた所まで行つてしまふのは良人がどこかに性格的に缺陷があるからである。良人が、母を敬愛すると共に、妻を心から愛してゐれば、母と妻との間に立つて、何等かの調和點を作れないことはないと思ふのである。

極端に云へば、嫁が姑に苦しめられてゐるのは、良人の責任である。良人が、何處か、ダラシがないからである。良人が、人間として立派であれば、結婚に於ても、わが母を考慮において、妻を選擇するであらうし、母と妻との衝突を未然に防ぐやうに、いろ〳〵な工作をするであらうと思ふ。

わが母は、良人にとつて、既定の事實である。その事實に、最も適當するやうに、妻を選び、又その妻を、その既定の事實に適當するやうに、指導し教育することは、全く良人の責任である

その意味で、姑と嫁との不和は、大部分は良人の責任であると云はざるを得ないのだ。

結婚前の妻の過失

良人の貞操は、妻にとつて重大問題である。貞操問題で、妻を惱ます良人は頗る多い。一生涯妻一人を守りつゞける良人は、極めて少いやうである。これに反して、大抵の妻は良人に對して、貞操を守るのである。が、中には、貞操問題で、良人を惱ます人妻もあるのだ。

人妻の貞操問題は、法律にも觸れるし、血統をも亂す心配があるので、良人の貞操問題に比すれば、ずつと深刻である。

妻の不貞に接したとき、良人は一生の危機に立つてゐるわけである。良人は、妻の不貞に對し、どんな態度を取ればよいだらうか。

第一は、(結婚前に於ける妻の過失)である。

結婚の當夜、もしくは結婚して後に、處女だと信じてゐた妻が、さうでなかつたことを知る不

幸な良人も、かなりあるやうである。

さうした場合、良人は出來る丈やさしく、妻がなぜ處女を失つたかを、訊ねるべきである。

妻が、十五六歳以下の少女時代に、暴力的に犯されてゐた場合などは、一種の災難として、寛大にその罪を許すべきであらう。事實や境遇に依つては、罪といふべきものが、そこにあるかどうかさへ、分らないと思はれるのだ。一人留守番をしてゐる時などに、親類緣者に破廉恥漢があつて、襲撃を受けたときなど、十五六歳以下の少女としては、何うにも出來ないのである。しかし、好奇心半分に、近所の知人などに接近して、その結果さうした不幸に會つた場合は、多少とも道德的責任はあるわけである。

暴力的でなくとも、教師とか目上の男子などに、巧みに誘惑された場合なども、また道德的責任は極めて輕いのだ。少女を保護する立場に在るものが、その位置を利用して、魔手を揮つた場合などは、十五六歳以下の少女としては、容易に防ぎ切れないのである。

しかし、二十歳に近い年齡の場合は、たとひ暴力的のものとは云へ、ある程度の責任を免れることは出來ないと思ふ。さうした境遇や事情に身を置いた責任を、免れることは出來ないと思

ふ。抵抗すれば、出來たであらうといふ非難も、免れることは出來ないのだ。

最後に、責任を免れることの出來ないのは、結婚前戀愛して、身を許した場合である。戀愛でなくても、意識的に身を許した場合である。これは、既に一度結婚したのと同じことである。

新婚の妻の、かうした前科を發見した時にも自分は、良人が出來る丈、妻の過去を許した方がいゝと思ふ。妻が、既に過去の戀愛を清算し、それを償ふ意味で、良人に純愛を捧げてゐることが分りさへすればだ。

こんな場合に、一番大切なことは、現在の妻の心境である。妻が、過去の過失を後悔し、現在良人を心から愛してゐるとすれば、良人が寛大な心で、その罪を許すことに依つて、夫婦は心の底まで、結びつくことが出來るのではないかと思ふのだ。

世の中には、花柳界にゐた女性を妻にしてゐる人も澤山ゐるが、あゝいふ人達は、お互ひの愛に依つて、妻の過去の陰影を淨化してゐるわけである。

まして、良人の中に、結婚するまで、童貞であつたと誇り得る人が、幾人ゐるだらうか。大抵の男性は、結婚するまでに、童貞を失つてゐるのだ。幾人の男が、充分なる權利を以て、妻の過

去を咎めることが出來るだらうか。

（過ちは人間の常である、それを許すことの神々しさよ）である。

しかし、妻の過去の過失のために、妻の現在の心までが、濁つてゐる場合は別である。妻の結婚前の戀愛が、なほ妻の心に尾を引いて、それが新婚生活を翳らすやうな場合も亦、別である。

妻が不貞を犯した場合

第二は（妻が不貞を犯した場合）である。

この場合も、良人は妻に對する處置を考へる前に、先づ自分自身深く反省すべきだと思ふ。妻が、過ちを犯した原因が、何處にあつたかを、よく〳〵考慮することが大切であると思ふ。

良人自身が、女から女へと渡り歩いて、妻を孤閨に泣かしめてゐる場合など、妻が眼の前に現れた男性の親切や同情に、つい心を惹かれ、知らず識らず垣を越したからといつて、良人が威丈

高になつて妻を叱責する權利が、あるかどうか。

なるほど、良人の不貞は、法律的に責任がなく、妻の不貞は、忽ち法に依つて罰せられる。しかし、神の前では、男女とも同罪ではないだらうか。

妻が不貞を犯した原因が、良人にある場合は、良人は妻の罪を糺す前に、先づ自分自身の罪を糺すべきではないだらうか。

が、良人に何等の過失がないのに、妻が不貞を犯した場合は、妻はいかに處置されても、仕方がないだらう。しかし、その場合にも良人が峻嚴な制裁を加へるのは、何うであらうか。

昔の武士は、妻が不義を犯した場合、良人も家事不取締といふ意味で、各々の藩主から罰せられてゐる。

妻が、不良で淫奔な女性である場合はともかく、普通の女性である場合、彼女が不貞を犯したとしたならば、どこか良人の方にも責任があると見られても、仕方がないと思ふ。冷淡であつたり、薄情であつたり、妻に對する關心が薄かつたり、妻を虐待したりした爲であるとも云へるのだ。だからと云つて、不貞を働く妻も論外だが、妻の心持をしつかり捕へて置かなかつた良人にも、多少の責任があると云へるのだ。

妻が不義を犯した場合も、直ちに法律の制裁を加へることは、あまりに嚴しい處置だと思ふ。離別した丈で、充分だと思ふ。いかに罪が重いとは云へ、長い間、一つ家に住んだ女性を、獄裡に送ることなどは、考へものだと思ふ。

不貞の罪は重しとは云へ、弱い女心の、つい心にもなく犯した場合なども、可なり多いのではないか。

近松の（鑓の權三重帷子）でも、不貞を犯した妻が良人の成敗を受けるとき、（なう懐しや）と良人にすがり寄るところを、斬られてゐる。

不貞の妻だつて、良人に對する愛情を全然無くしてゐる場合などは少いのだ。良人を愛しながら、境遇や事情や、一時の本能の發作で、心にもない褄重ねをしてゐる場合だつてあるのである。不義の妻が、良人への申譯に自殺をした場合などは、今でも三面記事に、時々出てゐる。

が、（身體の不貞）は犯さないまでも、（心の不貞）を犯してゐる妻は、可なり多いやうだ。家庭生活に慊らず、家庭以外に快樂を追ふ妻は、既に（心の不貞）に、一歩踏み出してゐると云つて

もよいのだ。世の所謂（有閑マダム）と云ふ種類の女性は、既に（心の不貞）を犯してゐると云つてもよいのだ。

かう云ふ妻に對しては、良人は充分に戒告を與ふべきである。（心の不貞）を許すことは、良人の愛情でなくして、却つて良人の薄情を示す場合だつてあるのである。

彼女達は、人妻として、最も危險な深淵に臨んでゐるので、それを巧みに救ひ出すことは、良人の義務でもあり、愛情であるとも思はれるのだ。

良人は、妻が人妻としての軌道を踏み脱さないやう、絶えざる注意を與ふべきである。それが、妻に對する本當の愛情である。妻を、いい加減に放たらかして置いて、一旦過ちを犯すと、峻嚴な態度に出るのは、小人に珠を預けて、その失敗を待つのと同じで、良人としては薄情極まる態度と云ふべきだと思ふ。

良人教育の必要

夫婦生活に於て、良人は妻に對する主權者であり、監督者であり、指導者であり、教育者である。

だから、良人が妻に對して、不滿があれば、妻を教育し指導し、妻の性格を改造することも出來れば、陶冶することも出來るのである。

妻が、ダラシない女であれば、これを指導し、教育して、堅實な女性にすることだつて出來るのだ。妻が教養がなければ、讀むべき書籍を選擇してやつて、彼女の教養をどんなにだつて、高めることが出來るのである。

妻と良人との趣味が違つてゐれば、自分の趣味に、妻を同化することだつて出來るのである。つまり、良人は、自分の位置を利用して、妻を自分の理想通りに作り上げる力があるわけだ。

それが出來ないとすれば、それは良人に、それ丈の愛情がないか、でなかつたら、良人にそれ丈の能力がないのである。

自分に愛情がなかつたり、能力がないのを棚に上げて、妻の缺點を數へ上げるのは、可笑しいのである。

それは、つまり、妻を自分以外のものだと思ひ、妻を自分の相手方だと思ふことから、起る矛盾である。

妻を、自分の延長だと思ひ、妻を自分の肉親だと思ひ、妻を自分から絶對不可分のものだと思へば、そんな不平不滿は云へないものである。妻の缺點を數へ立てることは、結局自分の缺點を數へ立てるのと同じになるのだ。

自分の愛兒の缺點を數へ立てる親は、滅多にないやうに、良人たる人も、自分の妻の缺點を數へ立てることは、自分の缺點を數へ立てることだと考へるべきだと思ふ。

つまり、良人の罪は妻の罪であり、妻の罪は同時に、良人の罪であると思ふ所に、完全な夫婦の結合があると思ふのだ。肉親は、切つても突いても離れることが出來ないやうに、夫婦も割いても切つても離れられなくなるのが、夫婦生活の理想であると思ふ。

しかし、さうした理想に到達するのには、何うしても良人の責任が大きいのだ。何となれば、良人は夫婦の間では、主權者であり、監督者であり、指導者であるからだ。良人の方針一つ、良人の考へ方一つで、どんな圓滿な家庭でも營まれ得るのである。良人が、妻を非難したり、妻を

罵倒したりするのは、大抵の場合、自分の面上に唾することになるのだ。

良人さへ良ければ、いくらでも良き妻を作り上げることは出來るのだ。しかし、良き妻が良き良人を作り上げることは、極めて稀だ。彼女は家庭に於て、教育者でも指導者でもないからだ。

現代に於て、理想の夫婦を求めることは甚だ難い。良き妻がないわけではなく、良き良人が少いからである。理想の夫婦生活を營むには、妻たるもの丶心掛けも大切である。しかし、それ以上に大切なのは良人たるもの丶心掛けである。

が、現代の學校でも社會でも、何處に良人教育が行はれてゐるか。良妻賢母の叫びは、全國の教室に充ちてゐる。しかし、良夫賢父を說く聲が、どこに聞えるか。男性が、人間として成功し榮達する道を說くことも、必要である。が、それと同時に、家庭に於て良き良人なり、正しき良人となる道を說くことも、また必要なことではないだらうか。

一國の道德も、風敎も、健全な家庭から、起るべきではないだらうか。それには、よき政治家であり、よき實業家であり、よき軍人であり、よき學者である前に、よき良人であることが、あらゆる男性の義務であると思ふ。

貞操讀本

貞操と誘惑

休暇中に童貞を失ふ　（相談の手紙）

私は現在高等學校の三年生です。去年の冬から、知人に頼まれて或中學受驗生の勉强を見てやつてゐます。その子供の家庭A家は、祖母と、父と、女學校を三年前に出た姉と、それに女中二人で、かなり豐かな生活をしてゐます。父なる人が會社の用務で出張勝ちなので、家庭は何となく淋しく、そのため姉弟は私を無二の話相手として、家庭の内部のことなども相談するので、此方も親身になつて相談相手になつてゐました。しかし故郷N市に婚約者がある私は、彼女に對し

て、友人以上の親しみを示さないやうには、いつも心がけてゐました。

今年の夏、私は愛人のゐる故郷で、楽しい休暇を過しましたが、圖書館で少し調べなければならぬものがあつたので、八月の二十日頃、心を殘して上京の途に就きました。その途中、以前からの約束もあつたので、小田原に避暑してゐるA家の姉弟を訪ねたのでした。

夕方、暇を告げようとする頃から、急に天候が變つて激しい雨降りになりました。それで引止められるまゝ、私は豫定を變へてそこに一泊することにしたのでした。あゝ私は何といふ意志の弱い人間だつたでせう！　遂にその夜、二つ年上の彼女の誘惑に、私は脆くも敗れてしまつたのです。

痛いやうな悔恨に苦しめられながら、二度とあの過失は繰返すまい、早く何かの口實を見つけて、彼女の家から遠去からうと決心した私は、新學期になつてからは、彼女の誘惑をいつもきつぱりと拒絶し續けてゐます。

「私は欺かれた、私は貞操を弄ばれた、あなたは卑怯者だ！」

彼女はかう云つて私を罵ります。貞操を破られたのは君ばかりぢやない、自分だつて失ふものは失つたのだと思ひながらも、卑怯者といふ言葉の前には、私はうなだれざるを得ません。私には、婚約者の前に告白して赦しを乞ふ勇氣もないのです。

烈しい彼女の性格を以てすれば、一切をその父に訴へるかも知れないし、N市の婚約者に手紙を出さないとも限らない。或は學校へ訴へるかも知れない。そんなことを考へると、私は學業も手につかない程、不安な氣持になります。この煩悶を解決するにはどうしたらいゝでせうか。

聖者も敗れた肉の誘惑

この學生は、不用意の間に、實に重大な過失を犯してしまつたものだ。肉體の誘惑に對して、如何に人間が無力なものかは、トルストイの「神父セルギイ」を讀めばよく分る。

幾十年かを修道院と山林で苦行したセルギイは、聖者として世人から尊崇され、その信仰の力は幾人かの病者をも癒した。しかし彼の堅固な道心も、或夜現れた一人の娘の誘惑のためには

脆くも敗れねばならなかつたのだ。

人間の肉慾といふものは、それ程盲目的なものである。たとひトルストイの作品は讀まなくとも、高等學校の三年にもなつてゐれば、その位のことは分つてゐる筈である。風邪をひきやすい體質の者が、なるべく寒風に當らぬ注意をするやうに、誘惑に弱い人間は、なるべく誘惑に近よらない注意をするのが肝腎である。誘惑される位置に身を置くといふことは、半ば誘惑することである。だからこの問題の場合、たとひ誘惑されたにせよ、その學生に責任がないとは云へない。

その後、二度と同じ過失を繰返すまいとしてゐるのはよい。しかし貞操上の過失だけは、「改むるに憚ることなかれ」とだけ云つては濟まされない。何かの口實を設けて相手から遠去かれば、それで濟むといふやうな態度は卑怯である。これではその娘が憤慨するのも當然だらう。「去るものは日々に疎し」の言葉の通り、遠去かることは、確かにかういふ場合の一つの解決法にはちがひない。時間的にも空間的にも、距離といふものは、愛情、悲歎、怨恨等、すべての人間の感情を冷却させる役目をする。この學生が愛人と距離を隔てゝゐたことが、近くにゐる他の異性と

交渉させた一つの原因にもなつたのである。しかし遠去かる前に、問題を解決しなくてはいけない。

相手の氣持も聞き、自分の氣持も話し、赦しを乞ふところは乞ひ、責任を分け合ふところは分け合つて明瞭にきまりをつけ、それから遠去かるやうにしなくてはいけない。若しこの訴への通りだとすれば、責任は五分々々だから、恐らく娘は父に告げることもしまいし、學校へ訴へて行きもしまいと思ふ。

しかし、婚約者に別れて來たその日、他の異性の誘惑に敗けたといふのは、あまりに弱すぎるやうに考へられる。結局この學生は、婚約者に對して、眞劍な愛情を感じてゐないのではなからうか。この程度の愛情で、この先幾年間か、その婚約を果して無事に運び得るかどうか。さうした根本的な問題にまで溯ぼつて、この際考へ直す必要がありはしないかと思ふ。

とにかく何を考へるにしても、もつとはつきりした、強い氣持を持つといふことが、第一に大切である。

童貞は碎けやすき珠

肉親愛や家庭的なうるほひから離れて、無味單調な下宿生活をする學生が、家庭教師などで他家へ出入りしてゐる中、年上の異性に誘惑されて、童貞を失つてしまふといふ例はよくあるやうだ。この種の誘惑に對して、強く身を護りきる青年は、十人の中八人あるかないかだらう。青年は高いもの、清いものにあこがれる氣持も強いが、肉體的慾望もそれに劣らず強烈である。それに貞操上の問題では、男性は後に責任が殘らぬやうに考へられやすいために、女性より遙かに容易に、貞操線を越えてしまふのである。

主人の不在勝ちな家、結婚に失敗した娘のゐる家、未亡人の家などに下宿することも、かなり危險である。父兄は子弟の下宿先に就ては常に注意してゐる必要がある。

さうした年上の女との情事のために、止むなく愛情なしの結婚生活に入る。やがて教養、趣味

性格などの相違のため、夫婦生活が圓滿に行かなくなる。國許の父兄には內密の生活なので、物質的に女の厄介になつてゐたりして、簡單に別れることも出來ず、子供でも生れゝば、なほのこと、その生活から脫け出すことが難しくなる。さうした泥濘の中で身をもがくやうな、暗い生活を送つてゐる男性も、世間には少くないのである。

これは最初、過失だと氣付いた時、はつきり態度を決めて、清算してしまへば、さうした長い不幸を經驗せずに濟むのである。

戀愛する者の掟

戀愛は人間の心の解き難い一つの謎である。到底結婚出來ないといふことが分つてゐても、止むに止まれぬ愛情から、戀愛に走る場合もある。或は結婚といふ目的意識なくして、たゞ一時的の衝動によつて情事に陷る場合もある。これは人間の弱點として許すにしても、たゞ結婚に行か

れない戀愛に於ては、互に相手の心と體をいたはり合つて過失を犯さぬやう、そして一日も早くその迷路から拔け出すべく努力するのが、男女共に必要な心掛けであり、また一時的の情事に於ては、特に男性は、相手に必要以上の傷手を負はせないやう、はつきり云へば、惡疾を感染させたり、姙娠させたりしないやう注意すべきである。

私は嘗て、「カースティン家の掟」といふ英國の小説を讀んだが、これは「戀愛はしても、相手を不幸にするな」といふ掟を强調した小説である。若しこれがネフリュードフ侯爵家の掟であつたなら、「復活」のカチューシヤは、あの悲痛な運命に泣かずに濟んだであらう。世のすべての青年男女は、このカースティン家の掟を掟としなければならない。

云ふまでもなく、貞操道德は男女の協力によつて高められるものである。女子の貞操觀念が、男子に較べて遙かに高いのは、男性の處女尊重、家系尊重に負ふところが多い。若し女子が男子の童貞を尊重してゐたら、今日男性の貞操觀念は、かゝる低いところに低徊してはゐなかつたらうと思ふ。

貞操と享樂

カフエーに咲く戀（相談の手紙）

今年の春の初頃から、私は或カフエーにしば〳〵行くやうになりましたが、その中一人の女給に對して戀を感じるやうになりました。彼女は二十一歳、極めて善良な性質で、他の女給たちとは、その言動が全く異つてゐるやうに思はれました。私はたゞ戀を感じるだけで、それを打明けることも出來ず、日夜懊惱してゐましたが、眞夏の或夜、他の女給が傍にゐない折を見て、心の中を打明け、近い中にどこかへ遊びに行かうと誘ひましたところ、意外にも彼女はその場で承諾

してくれました。

私たちは、次の土曜日の午後から箱根に行き、その夜は强羅の或旅館に泊つたのでした。ところが、私の夢は一夜にして破れてしまひました。彼女は既に尊い處女性を失つた女でした。その上彼女が私に隨伴したのは、決して好意から出たことではなく、たゞ金錢のためだといふことがはつきりわかりました。

私はその後、そのカフェーに行くことを、ぴつたり止めました。しかし彼女は毎日のやうに手紙をよこし、箱根で金錢のことを口にしたのは、決して金で操を賣るつもりで云つたのではない止むに止まれぬ事情からだとて、彼女の哀れな家庭の事情を訴へ、自分は心からあなたを愛してゐるのだから、ぜひ店へもたまには來てくれと云つて來ます。

その手紙を見ると、何だか彼女が可哀さうになつて來ます。

いつそ思ひ切つて、彼女の熱情の中へ飛びこんで行かうかといふ氣にもなります。どうしたらよいでせうか。

私は二十四歳、兩親の許を離れて下宿生活をしてゐる、大學在學中の者です。

戀愛に戀する勿れ

まだ世間を知らない、殊に戀愛に經驗のない學生などの陷りやすい問題である。

一體カフェーやバーの女に、純眞な戀愛など求めるのが間違ひである。食料品店へ行つて、書籍がないからと云つて怒るのは、怒る方が無理である。何もカフェーやバーにゐる女性のすべてが、戀愛無資格者だといふのではない。無論、そこにも賢いしつかりした女性がゐるにはちがひないが、たゞこの學生が求めるやうな戀愛の相手は、まづゐないと見て差支へあるまい。

幾人かの男と戀愛もし、別離もして來なやうな女、父親のない子供を育てるため苦勞してゐるやうな女、失業した愛人のため働いてゐるやうな女、さうしたさまゞ〳〵な人生の苦難に鍛へられて、强く賢くなつた女性はゐるだらうが、この學生の求めてゐるのは、さういふ女性との眞劍な戀愛ではないのだ。

箱根行をその場で承諾したことだけでも、大體どういふ女か位は分らなければならない筈である。それが分らない程初心な學生が、さういふ場所に出入りするのは、かなり危險なことゝ云はなければならない。エレン・ケイは、「青年の戀愛は、心靈的である場合ですら、それは戀愛するのではなくして、戀愛を戀ふのである。また新生活そのものを求めるのではなくて、その經驗を熱望するに過ぎないのである。故に、未成熟の青年の戀愛感情は、幻影の上に築かれるものである」と云つてゐる。

それでなくとも「戀愛は盲目」である。我々の周圍で行はれてゐる戀愛を見ても、非常に適當した男と女が戀愛してゐるといふ場合は稀であつて、あの男があんな女と戀愛してゐるのか、あの女があんな男と戀愛してゐるのかと眼を瞠るやうな場合が多い。まして戀に戀するやうな青年が、その戀愛の對象を、現實的なあまりに現實的な、カフエーの女給などに求めた場合、かうしか結末になるのは當然すぎる位當然である。

「一度だけ、たゞ一度だけ、そして唯一人に」といふ、ブラウニングの有名な言葉がある。しかし人間の戀はなか〳〵さうは行かない。二度も三度も戀愛する人が多いのである。それは止むを

得ないとして、たゞ戀愛する時には、出來る限り相手を不幸にしないやう心掛くべきだ、と私は前にも述べた。相手を不幸にするなといふことは、一面、自分を傷けるなといふことにもなるのだ。それには結婚に結びつけて考へられないやうな戀愛、所謂戀愛のための戀愛に陷る機會を、出來るだけ避けることが肝腎であると思ふ。學生はカフエー、バー、ダンスホールなどに近よるな、と私は云ひたいのである。

この女給が、金錢を求めたことは、或はその境遇上止むを得なかつたことにせよ、その境遇に同情する心と戀愛とは、全然別個のものであることを、この學生ははつきり認識しなければならない。たとひ相手が心から學生を愛してゐるにせよ、この戀愛を進めて行けば、不幸な結末に終るのは分りきつてゐるのだから、今の中に引返さなければいけない。

享樂を奪はれた學生群

一體學生がカフエやバーへ行く目的は何かといふと、恐らく異性との接觸だらう。下宿生活をしてゐる學生たちは、カフエーやダンスホールにでも行かなければ、若い異性と話をする機會もないのだ。

農村の青年たちには、村の娘等がゐて、野良へ出て働きながら、一緒に談笑したり、唄つたりすることも出來るし、お盆とか祭禮とかいふ、彼等にとつては愉快な青春の饗宴もある。小學校を出て店員になつたり、職工になつたりしてゐる若者たちには、女中や同僚のやうな、身近かに親しめる異性があつて、比較的簡單に戀愛し、結婚することが出來る。しかし學生だけには、さうした相手がなく、彼等は滿たされぬ精神的空腹に、惱まされてゐるのである。

現在東京だけで、專門學校の生徒が十萬、大學の學生が三萬人ゐるさうだが、その大部分は下宿生活をしてゐるのだ。彼等には下宿と學校の生活しかない。そして學校はたゞ授業をするといふだけで學生の生活といふことは殆ど考へてゐない。下宿屋の朝夕は、無味そのもの、單調そのものである。勢ひうるひほを求めて、洋樂のレコードのある喫茶店へ、女給のゐるカフエーへ、それから少し享樂的傾向の多い者は、ダンスホールへ行くやうになるのである。

多數の學生の中には、さういふ場所へ出入りするために、貞操上の過失など犯す者も出て來るし、また時には戀愛に行詰つて、女給やダンサーと心中したりする者なども出て來る。しかしこれらの者は、その戀愛觀、人生觀などに就ては批判さるべき點があらうが、大體その心情に於ては純眞なものが多いので、一概に學生の墮落といふやうな言葉で、評し去るのは過酷ではないかと思ふ。

曾て、學生のカフエー、喫茶店へ入るのを取締る規則が出來た當時、これに關して、帝大の大室學生主事が、次のやうなことを述べてゐるのを、何かで讀んだ。

「今の日本の學校教育の大きい缺點は、學生の生活といふものを考へない點、つまり生活全體の教育でないことだ。カフエー、喫茶店に行くことを禁止するなら、それに代るべき慰安を與へることを考へねばならぬ。自分は毎日、晝食後、ラヂオ體操をやることにしたが、學生が集まらない。そこで前後によい西洋音樂のレコードを聞かせることにした。すると學生がよく集まつて來た」

これによつても、學生が何かしら生活のうるほひを求めてゐることが分る。詮じつめればその

要求は、性的欲求であるかも知れぬが、そこまで意識させない前に、文學、音樂、美術などを與へることで一應の解決はつけ得ると思ふ。

飲酒の問題も、男性の貞操と關聯して考へられねばならぬものである。酒を飲まない人は、カフェーとか、花柳街とかに足を入れる機會が少いのが普通である。「酒の上の間違ひ」といふのは、よく聞く言葉だが、それだけ飲酒家には、貞操上の過失も多い譯である。學生の純潔性を護るためには、學生の禁酒は大いに奬勵したい。

最近の新聞で見ると、先頃の關西地方の大風水害から、兒童に氣象知識を與へる必要を痛感した文部省では、近く小學校の教科書の一部を改訂するとのことであるが、風水害に劣らぬ飲酒の害なども、國民に深く感銘させるためには、小學校、女學校、中學校の教科書などで、その問題を取扱ふべきだと思ふ。

まづ戀愛の撰擇力を

結婚問題の研究者として有名なジョンソン博士、曾て日本の結婚問題調査に來朝したこともある人だが、この人の意見は、「よき結婚をするには、選擇する機會を多くし、もつと早婚して、惡かつたらやり直すのがいゝ」といふのである。

惡かつたらやり直すといふのは、理想論としてはいゝが、實際問題としては、簡單に實行出來ない。しかしよき選擇をするといふことは、結婚し直すことよりは遙かに實行しやすい。如何なる女性が男性が、妻とし、夫としてよいか、その判別力を養ふためには、男女共學なども一つの方法であらう。

世間の人は、若い男女が一緒に勉強したりするのは、非常に危險のやうに思ふが、十年來、男女共學の文化學院に教鞭をとつてをられる河崎ナツ女史の話では、學生同志の戀愛など、極めて

稀にしかなく、親たちが許して結婚させたのが三組、だらしなく結婚したのなど、一組もないさうである。そこには女子ばかり教へてゐる人、男子ばかり教へてゐる人の、想像もつかなかつたやうな好もしい空氣が、生れ出るとのことである。それに常に異性に接觸して、その刺戟に馴れるからカフエーやバーに行つてそれを求める必要もなくなる譯である。もと〳〵兩性が相牽くのは自然なのだから、それを抑壓しないで、善導して行くことが大切だと思ふ。

撰擇力を養ふといふことは、特に女性にとつて必要である。戀愛結婚も出來ず、父母のい〻加減な撰擇で、未知の男性の家の中に投込まれる處女の身の上を思ふと、私はいつも憂鬱になる。せめて呉服屋でお召を一反買ふ場合に示す、女らしい用心深い撰擇を、なぜ良人の撰擇に示さないのだらう。着物は、生涯に幾度も替へることが出來るが、夫は一度しか持てないことを十分知つてる筈だのにと思ふ。感情的には好きになれても、實際的には好きになれぬといふ程の分別力を、これからの女性は養つて貰ひたい。女性がしつかりした撰擇力を持つやうになれば、從つて男性の貞操觀念も、向上する譯である。

貞操と賣淫

その後に來るもの

（相談の手紙）

或町の小學校で教鞭をとつてゐる者です。年は二十五。一年程前から、同じ町の十九になる娘と戀に落ちてゐました。彼女の兩親ははつきり結婚を許した譯ではないが、我家に出入りする青年と娘との間に、早晩結婚問題が起るだらうことは豫想もし、期待もしてゐる位です。たゞ彼女には二つ年上の姉があるので、その結婚が濟まなければ、妹娘を嫁にやる譯にはいかないといふことは、それとなく私に洩らしてゐます。

二人は、愛情を誓ひ合ふ言葉や手紙は取交してゐるが、そして接吻までは行つてゐるが、それ以上の關係には進んでゐません。

しかし接吻を許されてから、私は二人きりで會ふ時、しば〳〵最後のものを要求しましたが、彼女はどうしてもそれを許しません。

私は慾情に負けて、或夜遂に町から二三里離れた市の遊廓に、足を入れてしまひました。その後も自責は感じながらも、數回通ひました。

ところが近頃になつて、心配してゐた症狀が、私の體に現れだしました。しかも戀人の姉の緣談がまとまつて、一二ヶ月後には擧式の運びになつたのです。それが濟めば、私たちの結婚が問題になるのは當然です。

今更のやうに、私は慙愧し狼狽しました。その後は遊里に足を向けることは斷然止め、その代り同じS市の醫者の許に通つてゐます。

若し病氣が本復しない中に、擧式の話が起つたら、明かに打明けて延期して貰ふべきでせうか。そのため戀人の怒りを買つたら、どうしたらよいでせうか。

鳥潟事件の再檢討

この問題から聯想されるのは、當時社會に異常なセンセーションを卷起した、例の鳥潟博士令孃の結婚解消問題である。新婦は科學者の父の血を受けて、極めて理性の勝つた女性であり、なほその直前結婚した從姉が夫の淋毒に感染し、殆ど不具の狀態に陷つてしまつたのを目擊して、その病氣に對して極度の恐怖を感じてゐた時であつたため、結婚初夜、新郎が、普通の男性の持ち得ない勇氣と正直とをもつて、過去の性病を告白したその純眞な態度を、受容れるだけの溫情を持ち得なかつた。そして事件は悲劇的なあの結末を告げたのであつた。

新婦が、あの場合、若し新郎の童貞でなかつたといふ點に憤りを發し、新時代の女性を代表して、男性に貞操を要求すべく、プロテストしたといふなら、問題は別である。しかし彼女は、「私はもとより配偶者が純潔であると信じてゐた譯ではなく、また絕對に純潔でなければいけな

いといふやうな理想論をもつてゐる譯ではありません」と云つてゐる。たゞ性病を患つたことを、結婚當夜まで隱し通してゐたといふことを憤つたのである。

當時彼女に對する一般女性の批評は、「理性的な近代女性である」とか、「待望の女性が現れた」とかいふやうなものだつた。これは一面から云へば、近代女性は、男性の貞操――尠くとも結婚前の純潔――は要求しないことにもなる。しかしそこまで男性に寛大であるなら、婚約前に罹つて、現在では殆ど全治してゐる性病を、しかも結婚初夜に、純眞な氣持からそれを告白した場合許せないといふことはないと思ふ。そこに矛盾がある。また眞に理性的な近代女性であり、科學者の血を受けた理智的な女性であるなら、性病といふものに就て、もつと深い理解があつてもよくはないか。治療もせずに新妻を不具者にしてしまつた男の場合と、臨床醫家であつて、十分な治療も出來、事前に新婦に打明けだけるの良心を持つ男の場合との區別位、つきさうなものではないか。またその夜敢然として峻拒するだけの冷靜さがあるなら、結婚前に健康診斷を要求する位の見識を持つてもよささうなものだ。少し考へれば、この問題は矛盾だらけである。

要するに一年の婚約期間は、單なる形式的なものに過ぎず、當事者同志の間に愛と理解とがな

かつたことが、この破婚の最大原因をなしたのだらうと思ふ。尠くとも新婦にもう少し愛情があつたら、同じ破婚に終らせるにしても、あれ程世間の批判の的にならずに濟んだであらう。

蝕まれたる青春

性病のために、明るく朗かなるべき青春を蝕まれてゐる人は、隨分多いことゝ思ふ。男性の徵兵適齡期は、感染率の最も高い時期で、適齡男子の罹病者は、或縣に於ては千人に對し二十八人强といふ高率を示したといふ。

男子の性病は、理論的には性交以外で感染する場合もあると考へられるが、まづその殆ど全部が賣淫によつて罹るといつてよい。ニューヨークの市設健康相談所で、一九一五年から一九一八年までの間に、健康診斷を受けた一萬三千五百二十四人の花柳病患者の中、一萬二千五百八十二人、卽ち全體の九二・八パーセントは男性患者で、殆ど全部が賣淫の結果であつたさうだ。

若い會社員などの間では、年二回のボーナスの後、痳病患者が目立つて殖えるさうであるが、一旦これに罹つたら、とても貫つたボーナス位では、始末がつかないことになる。東京大阪間を飛ぶ飛行機に乘るのをさへ、恐がるやうな青年が、性病感染の危險地帶へ、平然として出入りしてゐるのを見ると、私は全く不思議な氣がするのである。

賣淫が社會に及ぼす害惡は、風紀紊亂よりも、むしろ性病の傳播といふことにあると思ふ。現在全國にある賣笑婦は、大體娼妓五萬、藝妓七萬、私娼十萬ださうだが、その他數字に現れないものが多數ある。廢娼運動をしてゐる人の調査によると、全國では五十萬人の賣笑婦があり、檢黴されてゐるのは、その中わづか一割の五萬人に過ぎないのである。

賣淫と男子の貞操とは、極めて密接な關係がある。從つてそれは女子にとつても重大な問題でなければならぬ。しかし賣笑の根絶といふことは、恐らく人間社會の存續する限り、至難のことであらうと云はれてゐる。神學界の最大權威者と今日でも見做されてゐる聖トマス・アクイヌは、「都會に於ける賣春婦は、宮殿に於ける下水溜に等しい。もしそれがなければ、宮殿は不潔な惡臭を放つ場所となるであらう」と云ひ、ヒューゲル博士は、「文明の進歩は次第々々に賣淫をより

心地よい形式の下に蔽ひ隱すであらうが、賣淫は世界の破滅と共にしか姿を消すことはあるまい」と云つてゐる。

ギリシヤ神話は、美の神ヴイナスがその子サイキーの行方不明になつた時、商業の神マーキュリーをして、誰でもサイキーの居所を告げてくれる者には、七つの接吻を與へ、連歸つてくれたら、「更に何ものかを與へん」と、觸廻らしたと傳へてゐる。神話に於てさへも、既に一種の賣淫は現れてゐるのである。英語では賣淫のことを「女の一番昔からの職業」と云つてゐるが、とにかく賣淫は、結婚そのものよりも起源的には古いといふ、社會學者の通說によつても、その根絶が以何に至難であるかゞ分らう。

「箱入りの貞操」を排す

そこで、せめて公娼制度だけでも廢止したいといふ運動が、今日行はれてゐるのである。これ

に就ては賛否兩論があり、賛成論者はそれが人道上、風教上、衛生上、有害無益な悪制度であると主張し、反對論者は、賣淫の存在を認めざるを得ない以上、これを散娼として許可するより、檢黴その他の取締上便利な密娼として存在させる方が、それこそ風教上、衛生上よいではないかと反駁する。

曾て公娼廢止の請願をするため、廢娼團體の人々が、街頭に立つて、通行人の賛成署名を求めた時、良家の夫人らしい女性で、「公娼を廢止すれば、良家の子女の貞操が危險にさらされる虞れがあるから私は不賛成です」と拒んだ人もあるさうだ。この問題に就ては、ポーロに次ぐキリスト教の堅固な柱石であり、且つ熱心に禁慾主義を説いた聖アウガステインでさへ、この夫人と同じやうに、「公娼を廢止すれば秩序の紊亂が到る所に起るであらう」と云つて、これを社會風教上の安全瓣として許容してゐる。

しかし、「良家の子女」の貞操を護るためには、五萬にも達する氣の毒な女性の貞操を、泥土の中に放置していゝかどうか、考へる餘地があると思ふ。男性の無制限の慾望が、制禦されねばならぬのは勿論であるが、白晝暴力を振つたりする男はまづあるまいから、良家の子女たるものも、

「箱入りの貞操」ではなく、少し位の危險にさらされても、たやすく犯されないやうな訓練を積むことは、必要であらう。

女子の性慾と男子の性慾

そこで、前掲の相談の手紙に就て考へる。まづ結論から云へば、この青年は徹底的に病菌を驅除せねばならぬ。そして全治するまでは、結婚を延期することが絶對に必要である。そのためには婚約者に率直に打明けて詫びなければなるまい。

相手は一時は驚きもし、悲しみもするだらうが、愛情を感じてゐれば、大抵は許すと思ふ。二人の間で賢く處理して、兩親には娘が何とか口實を設けて、式を延期するやうに計らつて貰へばいゝ。

しかし、この青年が最初、性病に就てもつと正しい知識を持つてゐたら、こんな煩悶はせずに

濟んだ筈である。一體性教育の必要といふことは、うるさい程耳にするが、時が來れば教へなくとも、自然に知つて行くやうな性知識より、もつと性病の知識などを明確に與へる方がどんなに有益であるか分らない。

「宅の主人は、役所で痳病の人と机を並べてゐたため、感染したのださうです」などと、醫者の所に相談に來る婦人もあるさうだが、これなどはナンセンスとだけで笑つては濟まされない。

次にこの青年は、愛人があるにも拘らず、何故遊廓などに行つたか。これは未婚の女性にとつては、恐らく理解に苦しむことだらうと思ふ。しかし二十四五にもなつた男子に愛人があり、しかも接吻を許されるまでに行つた場合、貞操を要求する氣持が起るのは自然である。そこまでは若い女性でも理解出來るだらうが、たゞどうして結婚までその要求が抑へられないのか、それが不思議に思はれるにちがひない。

女の方は、たとひ愛人の烈しい情熱に捲込まれて、一切を許さうといふところまで愛情が高潮しても、姙娠といふ問題がそこにあるため、また一瞬冷靜に返れる。理窟から云へば、それは男子も半分の責任を負ふべきものであるのだが、直接的でないため、情熱が燃立つて理性を亡した

時には、そんなことは問題でなくなる場合が多いのである。

どうして性の要求が、女よりも男に強いか。或はそれを抑制する力が、どうして男よりも女に強いか。その強い弱いは、どの程度にちがふものか。さういふことは生理學上、說明出來るのか出來ないのか知らないが、とにかく事實に於て、男性が童貞を保つことは、女性が處女を保つことより、遙かに困難なものと一般に信じられてゐる。

このやうな場合、愛人を傷つけないため、さうした場所に行くのだ、といふやうなことを云ふ男子もあるが、これは一種の自己辯護である。それだけ相手をいたはる氣持があつたら、それこそ苦痛を忍んでも、身を潔く保つ氣になる筈である。そんな詭辯を弄するよりも、むしろ自制しきれなくて行つたといふ方が、正直で男らしいではないか。

しかし、かういふ問題で惱む青年は、もつと積極的な解決法を考へるやうにしたらどうか。この場合、姉の結婚が濟まなくてはといふが、それは普通の順序はさうであるが、何も絶對にさうなければならぬといふのではない。妹が先に結婚する例はいくらもある。兩親を說いて、自分たちの結婚の期日を早めて貰ふといふのも、一つの方法だらうと思ふ。

貞操を失へる良人

奪はれたる愛情（相談の手紙）

私は二十歳の時、三つ年上の良人と、周圍からも羨まれるやうな幸福な戀愛結婚をしました。平和な生活十年、今は三人の子の母でございます。

私には女學校時代からの親友で、結婚後一年で夫に死別し、その後獨身で職業婦人になつてゐる人がありました。姉妹のやうに親しいので、幾日も〳〵私の家に泊つて行くこともありましたが、しつかりした人なので、最初は露程の疑ひも抱いたことはありませんでした。去年の夏頃か

ら、何だか良人との間に、腑に落ちない素振りが見え出しましたが、氣のせゐだと幾度か思ひ直して默つてゐました。

ところが、遂に友は姙娠してしまつたのです。良人の告白によつて今まで私の眼をかすめて、外でしば〳〵會合してゐたことを知りました。私は眼の前が眞暗になるやうな氣持でしたが、良人と友が涙を流しての賴みと詫びに、齒を喰ひしばる思ひですべてを許し、女を或產院へ入れてお產をさせました。しかし養育料としてまとまつた金など出す餘裕はないので、引取つて育てようとしましたが、友人は自分の親の手許で育てるからと云ふので、心ばかりの金を出して解決をつけました。

此頃になつて、友の叔父といふ人がやつて來て、友に商賣をさせるか、養育料を仕送るかとの要求です。その要求に應じる義務があるでせうか。又先方に貞操蹂躙の訴訟を起す權利がありませうか。私は戀愛結婚までした良人の、この不貞行爲によつて、今までの人生觀、夫婦觀を根柢から破壞されて、茫然とした氣持で毎日を送つてゐます。

倦怠が不貞を生む

夫婦生活が性慾的愛を基調とし、性慾的愛は好奇心を基調としてゐる以上、夫婦生活には早晩倦怠期が來ることは免れ得ない。しかし子供がある場合、妻は育兒が生活の大部分を占める關係上、倦怠に苦しめられる程度が比較的少い。良人も妻と同樣「子供の父」であるといふ氣持が强ければ、倦怠感は大いに緩和されるのであるが、大體に於て男は、家庭にある時間より、家庭外にある時間の方が多く、從つて妻の良人、子供の父といふ氣持から離れてゐる時が多い。また他の異性に接する機會もしば〳〵であり、しかも男性の性慾には、女性のそれよりも遙かに、好奇心的要素が多く含まれてゐるので、勢ひ、どうしても貞操上の冒險を冒しやすくなる。

とにかく倦怠期にある夫婦は兩方で和合法を考へ、妻は良人の仕事を手傳ふとか、良人は妻の趣味に同化するとかいふやうに、意識的に努力する必要がある。「倦怠は曲者」と思はねばならない。西洋の探偵仲間では、「倦怠を探せ！」といふ言葉を犯罪捜査のモットーとしてゐるが、男女の不貞行爲を防ぐ第一の方法も、やはり倦怠を捜して家庭の外に驅逐することである。夫婦貞操擁護のモットーは「倦怠を追出せ！」である。

良人の貞操の生命線

さて實例のこの人妻が、良人の不貞を知つた時、忍び難きを忍んで、良人をも相手の女をも傷つけずに處置した態度は賞むべきである。かういふ場合、妻があまり潔癖すぎて、良人の行爲を完膚なきまでに非難したり、相手の女を徹底的に罵倒したりすることは、却て事態を惡化させ、所謂、「毛を吹いて傷を求める」結果に導きやすいものである。不貞の男に對して嫉妬するのは、女の當然の權利ではあるが、しかし權利を行使するのが、果して賢明な策であるかどうかは、愼重に考へる必要があらう。

女の叔父の理不盡の申出は一蹴してよい。子供を引取らうといふのは此方の最大の好意である。それを後になつてそんな要求をして來るのは無法であるし、これは多分叔父の考へから出てゐるものと思はれるから、場合によつたら、直接先方の女に會つて話をした方が早く片附くかも知れない。貞操蹂躙の訴へなどしたところで、先方が不利に決つてゐるから、そんな威嚇に怖れることはない。

たゞこの人妻の一つの手落は、最初二人の間が變だと感付いた時はつきり眞相をつかむやう努力しなかつたことだ。嫉妬と思はれるのが嫌さに、或は眞相を知るのが怖ろしさに、二人の行動を注意するのを怠つたかも知れないが、その時少しの勇氣と決斷力があつたら、或はこんな結果にならずに濟んだかも知れない。良人と友の裏切に對してぢつと辛抱したのは、辛抱しないより遙かにいゝが、しかしそれよりも辛抱する必要をなくす方が、更に賢明ではなかつたらうか。

男性の貞操は、單數か複數かである。妻以外の一人の他の異性を知つた男性は、十人の女百人の女と交渉を持つ危險性がある。だから妻は、良人の貞操の生命線たる單數を、全力をあげて防護しなければならない。

なほ原因に溯れば、如何に親しい間柄とはいへ、他の異性をしば〳〵家庭に寢泊りさせたといふことが、そも〳〵不幸の發端をなしてゐるのである。元來家庭といふものは、夫婦が中心となり、子供、兩親、弟妹などがそれに加はつて、形造られてゐるものだ。中心たる良人と妻がまづしつかり守り合つて、互ひに並行するやうなものは、なるべく家庭に入れないやうにすべきである。これは狹量とか不親切とかいふのではなく、貞操上の過失を犯さず、家庭の神聖を保つために必要な心遣ひなのである。

戀愛は至上ならず

前掲の實例の人妻は、戀愛結婚者である。それだけに良人の不貞を痛恨して、人生觀まで變つたと嘆いてゐるが、若し戀愛結婚が、夫婦生活の破綻を防ぐ注射劑とでも思つてゐたとしたら、それは甚だしい認識不足だと云はざるを得ない。その理由は「戀愛とは何ぞや」といふ問題を考

へれば、自ら明らかになるだらう。

私は戀愛を一つの精神的熱病と觀てゐる。戀愛をしてゐる人の、精神の病的な興奮狀態、熱病的苦悶、制し切れない煩悶、それらは肉體の病氣と非常によく似てゐる。戀愛にはまた幾つかの缺點がある。その一つは、戀愛は顏や容姿などの外觀的要素から起ることで、スタンダールもその「戀愛論」の中で「戀愛の道しるべは美しいといふことだ」と云つてゐる。魂に惹かれることもあると云ふ人があるかも知れないが、心の美醜必ずしも顏の美醜に正比例しないから、若い人たちにはなか〳〵その眞相は看破されない。碌に戀文も書けない無能な、しかし美貌な貴公子ヌーヴイエツトはロクサーヌ姫に愛されるが、精神高潔なシラノは、鼻が特別高く醜いばかりに、その純情がロクサーヌに通じるまでには十四年もかゝつた。これは有名なエドモンド・ロスタンの「シラノ・ド・ベルジユラツク」であるが、如何に容貌が戀愛に於て、重要な作用をなすかゞ分る。

次の缺點は、戀愛は必ず冷めるといふことである。アイルランドのシングの芝居に「悲しみのデアドラ」といふのがある。ナシイといふ若い騎士と、デアドラといふ美しい女性とが、デアドラを愛してゐる王樣の許から逃れて、サムハンといふ山奥へ入つて同棲生活をする。しかし十年近くもそこに暮してゐる中に、互の愛情が次第に冷めかけさうな不安を感じて來る。その時デアドラが、「二人の愛情を冷ます原因は、サムハンの夜の空に輝く星の數ほどある」と悲痛な聲で訴へるところがあるが、どんな烈しい戀でも、やがては冷める時が來るのである。

更にもう一つの缺點は、戀愛には選擇力がないことだ。エレン・ケイは、「戀愛には選擇力があつて、本能的によい相手を見つける」と云つてゐるが、私は反對に、戀愛は相手の選擇を誤る場合の方が多いと思つてゐる。

戀愛結婚者の拂ふ稅金

それでは何故戀愛などといふものが存在するか、それは結婚といふ苦い藥を飲ませるオブラートの役目をさせるためである。或る特定の異性と、生涯同棲するといふ約束を結ぶ結婚などとい

ふことは、普通の心理では容易に決行出來るものではない。一日二日の旅行ですら、氣に入らぬ同行者とするのは不愉快である。まして死ぬまで續く人生旅行の同伴者だと思へば、とても簡單にも、愼重にも、撰べるものではない。それで神樣が戀愛といふ作用を人間に課して、熱病的な發作的興奮で、結婚する勇氣を振ひ起させるのではないだらうか。

しかし最近私は、戀愛結婚といふものが幸福だとは考へられなくなつた。戀愛は相手に對する認識を不正確にするため、どうもシラノよりヌーヴイエツトを選び勝ちで、結婚後互の缺點を發見する場合が多いやうである。それに戀愛は常に未知なる精神と肉體へのあこがれであり、異性の不可思議な精神と肉體を探檢し、占領せんとする慾望であるが、夫婦愛は既知なるもの、世界中で最もよく知られたる異性に對する愛である。戀愛と夫婦愛とは、およそ性質の異つた二つのものであるのだ。

だから戀愛結婚をした男女が別れたからとて、特に問題にするにも當らないし、そのいづれかに不貞行爲があつたにしても、特別に烈しく悲歎したり、痛恨したり、或は普通の夫婦の場合より過酷に責めるのは、當を得ないと思ふのである。

むしろ戀愛結婚者が、幸福な夫婦生活を續けるためには普通の見合結婚をした人たちよりも、一層の努力が要るのではないだらうか。そしてまたそれは、戀愛の甘美な陶醉を味つたことに對する當然の負擔であり、一種の所得稅ともいふべきものだらうと思ふ。

性的不和の場合

舊友が良人の妾に（相談の手紙）

私の家は地方の小都會の呉服問屋として、何不自由ない生活を營んでゐます。たゞ一つの不幸は、數年前より私が病氣のため性的缺陷を生じ、家庭生活の樂しみを味ふことが出來ないことです。

良人は初めの頃は、花柳の巷に出入りして、その不滿を滿たしてゐました。しかし或る一人の女性を知つてからは、商賣上の必要以外には花柳街へ足を入れることは止めました。その女とい

ふのは、私が娘時代に通つてゐた琴の師匠の娘で、私たちはその頃はかなり親しい友人だつたのです。

私は良人が、その女に妾宅を構へさせてゐることも、知つてゐます。それで、折に觸れては云ひます。

『私はあの人に良人を奪られたと思ふととても堪らない氣がします。私は妻としての務めが果せない體ですから、あなたが他の女を愛すことを、とやかく云ふのではありません。たゞあの昔の友人にあなたを奪はれるのは嫌です。美しい女中を探して、その女中に仕へさせますから、あの女とは手を切つて下さい』

ところが最近、番頭の口から聞いたのですが、その女は「いつまでもこんな日蔭者でゐたくはありません。初めの約束通り正妻にして下さい。でなければ、今の中に身を退いた方がいゝと思ひます」と、しきりに良人に迫つてゐるさうです。私は良人に捨てられはしまいかと不安でなりません。

この不安はどうしたら消せませうか？

不幸なる例外

どういふ病氣から、どの程度の缺陥が生じたのか分らないが、若し良人の性病に感染して、さうなつたのだとしたら、實にこの婦人は氣の毒な人である。しかしさうであるとしても、この訴への上には、そのことに就て良人を恨むやうな言葉がないのを見ると、その問題に關しては、この人はもう卒業してゐるやうだから、こゝではその點には觸れずに置かう。

さて夫婦生活の基調をなすものは、何と云つても性生活である。夫婦の一方に性的缺陥があるのは、不自然な狀態だから、その夫婦の間には、從つて不自然な生活が展開して來るのは止むを得ないことゝ思ふ。この點に就ても、この人妻は諦めてゐる。たゞ昔の友人に良人を奪はれるのが嫌だといふのである。この感情は、一應は無理もないとうなづけるが、世間には妹に良人を奪はれる妻も少くないので、これは偶然その人が良人の愛の對象になつたのだから、今手を切れ

と云つても、どうにもならないだらう。その代りに、美しい女中を妾にせよといふのは、全然間違つた云ひ分である。自分一個の感情のため、他人を犧牲にして憚らないといふやうな態度は、絶對に誤つてゐる。さういふ利己的な考へ方をするやうでは、將來良人からうとんぜられる不安は十分ある。それよりも、良人の血緣の子供でも貰つて、家庭に溫い和かな空氣を漂はす樣にし、肉體的には果せない妻の務を、精神的方面で補ふ樣に心掛けるのが、賢明である。

男性が肉體的慾望のため、妾を置くといふことは、無論正しいことではない。貞操は女性には最も大切なものであるが、同時に男性にも、同等の負擔率を以て要求されねばならないと信じる。「男女間の性道德は複數であつてはならぬ。」と叫ばれるのは當然だと思ふ。たゞこの實例のやうな不幸な例外の場合は、止むを得まい。しかし良人は、妾を置くのは當然だといふやうな態度をとらず、妻の弱點に觸れる話題は務めて避けるやうな、こまかい心づかひを常に忘れず、武器を持たぬ者を武器で脅かすやうなことは、決してしないやう注意することが大切である。

また妾に對しては、若し本當に正妻にするなどと、最初に約束したのなら、それを取消し、その非望を捨てさせねばならぬ。女としては、一生日蔭者の身で通すのは、定めし辛い悲しいこと

であらうが、もと〳〵正妻のあることは承知でなつたのだから、そこはやはり諦めねばならぬ。どうしても妾といふ身分に甘んじてはをれぬといふ自覺が生れたら、その境遇から脱するのがいいのである。

離婚されはしまいかといふ、この人妻の不安は、杞憂に過ぎないだらう。この訴へで見たのでは、良人といふ人は別段冷酷非常識な性格とも思はれない。若し自分の病氣のため、妻がそんな不幸な體になつたのなら無論のこと、さうでなくとも、性交渉がなくなつてから既に數年、その間別に離婚問題も起らなかつたらしいところから考へて、今後とて家庭生活を破壞するやうなことはあるまいと思はれる。

あはれ、空しく咲く花

性的交渉を奪はれた夫婦は、如何なる生き方をするかといふ問題を取扱つた作品に、久米正雄

氏の「空華」がある。

二人の姉妹がある。姉は腦膜炎に罹つて白痴に近いが、妹は近代的な才色兼備の娘である。家が資産家だつたので、前代議士の江上といふ男が、選擧費用の持參金を條件に、白痴の姉と結婚する。江上はすぐれた人物で、財産結婚の罪を償ふつもりで、白痴の妻を愛してゐるが、何時となしに、義妹に愛を感じるやうになる。その氣持を紛らすため、自ら適當な相手を選んで義妹と結婚させるが、その良人となつた銀行家の若い息子は、美男子の好い人間だが道樂者で、結婚直後、新妻に性病を感染させ、その結果遂に夫婦關係は、肉から全然離れたものになつてしまふ。一方江上と姉娘の方は夫婦でありながら、精神的に隔りがある。そこで江上と義妹とが、肉の關係を離れた精神的の結婚、天上の姦通、靈的の姦通といふやうな世界に自然に入つて行く、といふ筋である。

ヴイクトル・ユーゴーは、一人の悲しみに打ちひしがれた若い女性に向つて、「あなたは心靈をお持ちにならないのですか」と呼びかけてゐるが、性交渉のない夫婦は、精神的愛情によつて生きる道がある。良人はその妻を、ドイツ語のミツドゲフエルテ、一緒に旅をする人、アンドレー

フの「人の一生」といふ芝居の中にある、人生の旅をする同伴者といふ意味で見ればいゝ。これは、結婚後幾年か經つて、夫婦間の性的興味が稀薄になつた時の心得としても必要である。

夫婦の愛は、最初は性慾的愛が勝つてゐるが、好奇心を基調とする性慾的愛は、夫婦生活が古くなるに從つて、次第に薄くなるのは當然である。だからそれに代る精神的愛が必要になつて來る。所謂「性慾の昇華」である。理想を云へば、五十になつても、六十になつても、性慾的愛と並行して行くのがいゝのだが、現實的には、性的愛の減退に反比例して、精神的愛が增進して行くのを、圓滿な夫婦生活と云つてよい。これは勿論夫婦の共同工作を必要とすることだが、本能的に性慾的愛、性的好奇心の旺盛な男性の努力を、より以上必要とすることを、世の良人たちは忘れてはならない。

貞操と嫉妬

貞操を疑はれて惱む（相談の手紙）

良人は私の從兄の大學時代の友人で、私たちは極く平凡な媒妁結婚をした間柄です。結婚後五年で、子供は三つになる女兒一人、現在良人は某大新聞社の營業部に勤めてゐます。

一昨年の冬、從兄は急性肺炎で死にましたが、その時私の悲觀の仕方が烈しすぎたとかいふことから、良人は從兄と私との過去に、戀愛關係があつたらうと云ひ出し、それからは酒に醉つて歸つた晩などは、まるで不貞の女にでも對するやうに、怒り罵つて私を苦しめるやうになりまし

た。それまでも酒は嫌ひな方ではなく、醉へばどちらかと云ふと怒りつぽくなる質でしたが、夜おそく歸ることなどは、月に一度か二度しかありませんでした。

それからは、段々醉つて歸る夜が多くなり、妙に疑り深く、嫉妬深くなつて、死んだ從兄のことばかりでなく、良人の學校時代の友人で、今でも親しく往來してゐる、Sさんといふ人との間をまで疑つて、妻として堪えられぬ樣な侮辱的な言葉を浴せるのです。思ひ切つて、死んで身の潔白を立てようかなどと、本氣に考へることさへあります。

しかし、翌朝醉がさめると、手をつかんばかりにして謝罪り、「もう決つして疑つたりしない」と誓ふのです。そしてSさんがいらつしても、少しもこだはらない樣子で談笑するので、今度こそ私の氣持が分つたかと思つてゐると、ものの一週間も經たぬ中に、また泥醉して來て私を苦しめます。

ところが突然、實に思ひもかけぬことを、Sさんから聞きこみました。それは良人には、銀座の或るバーに女給をしてゐる戀人があるといふのです。何でも半年位前からの關係らしいとのことなのです。良人は醉つても外泊したことは一度もなかつたので、その點は私は安心し切つてゐ

たのでした。Sさんの御親切な忠告によつて、私はそれ以後良人の樣子を注意して見るやうになりした。そしてたうとう最近、良人の洋服のポケットから、待合の勘定書を發見し、詰問しましたところ、良人はその女給との關係を告白しました。私は口惜しいやら悲しいやらで、烈しい口論のあげく、子供を連れて實家に歸つて來てしまひました。今後私はどうしたらよいのか、自分のことが自分に分らないで惱んでゐます。

嫉妬は愛情の番犬

この人妻のやうな立場に置かれてゐる婦人は隨分多いことゝ思ふ。そしてまた大概の男性は、強弱の差こそあれ、この良人のやうな傾向を持つてゐると云つて、差支へあるまい。

嫉妬はハバロック・エリスに云はせれば、「動物生活の最初に當つて見られる、根本的本能に基礎を置く」ものであり、デカルトに云はせれば、「所有保存慾に關する恐怖の一種」であるのだ。

とにかくどちらも原始的、根本的な感情と見てゐる點では同じである。

餓ゑとか性慾とかいふ人間の要求は、その目的物を與へることによつて滿足させられるが、嫉妬だけは、自分自身によつてゞなければ、決して癒されない程、內部的なもの、宿命的なものである。それだけに嫉妬する者の苦痛懊惱は大きい譯である。嫉妬を主題にした文藝作品で、最も有名なものは、シエクスピアの「オセロ」と、トルストイの「クロイツエル・ソナタ」であらう。オセロは奸智に長けたイヤゴーに嫉妬の炎を煽られて、貞淑な妻デズデモーナを寢床の上に刺し殺し、「クロイツエル・ソナタ」のポズドニシエフは嫉妬に懊惱した末、妻を絞めてその肋を刺すのだが、この二つの作品には、怖ろしいまでに深刻な、男性の嫉妬の苦惱が描かれてゐる。

愛するものを奪はれまいとする感情に根ざす嫉妬は、その程度によつては、却つて、男女間の愛情を刺戟して、ともすれば單調に流れ勝ちな夫婦生活に、色彩と變化を與へる役をする。妻の輕い嫉妬に一種甘美な感情を味はつたことがない男性は、まづ少いと云つてよいと思ふ。つまり嫉妬は愛情の裏面をなすもので、愛情を守る番犬である。男性の嫉妬といふ番犬に警戒されることによつて、女性の貞操といふものは、夫婦生活の柵の中に閉ぢこめられたと見ることも出來や

う。男性の反社會的な嫉妬の感情が、女性の貞操といふ美德を生み出したといふのは、興味あることではないか。

男性の嫉妬は、女性のそれに較べて遙かに積極的であり、破壞的である。私たちはオセロや、ポズドニシエフの存在を、今日でもしば〳〵新聞紙上で見るのである。一體男性には、女性に對して一種の優越感を持ち、それを誇示したがる通有性がある。だから妻に對して疑惑や嫉妬を感じても、比較的率直にそれを表はさない。堪へられるだけは堪へる。從つていよ〳〵抑へきれなくなつた時には、それは非常な烈しさで爆發する。そして血腥い双傷沙汰など起すのである。

嫉妬を如何に處理するか

この實例の良人は、恐らくずつと前から、妻に對して疑惑を抱き、嫉妬を感じてゐたのだらうと思ふ。それがたま〳〵從兄の死を泣き悲しむ妻を見ることによつて、制しきれなくなり、表面

に現れ出たものであらう。

良人は妻に對しては、隨分無理な註文もするのだから、疑惑や嫉妬に就ても、體面などといふ世間的な考へに囚れず、どん〳〵率直に問ひ質すのがいゝのだ。場合によつたら從兄にでも友人にでも、訊ねたいことは訊ねるがよい。友情を維持するために、夫婦間に罅を入れるなどは愚かしい業である。聞き質すべき材料もないやうな疑惑なら、さつさと解消すべきである。何の根據もなく、單に嫉妬しつづけることは、妻をも自分をも不必要に苦めるばかりだ。冷靜に觀察して若し不幸な想像が事實で、それが許せなかつたら、さつさと離婚すればよい。問題の根本にも觸れず、たゞ嫉妬しつゞけるといふのは、實に無意味なことだと思ふ。

貞操道德を生むためには必要だつたかも知れないが、今日になつては、嫉妬は人間にとつて大して必要な感情とは思へない。むしろそのために受ける害毒は實に大きいのである。人體に於ける盲腸を、手術によつて切除してしまふが如く、人間の感情に於ける盲腸的存在たる嫉妬をも、取り去ることが出來たら、男女間の無意味な苦しみはどんなに救はれるか知れない。

しかし多くの場合、世間の夫婦といふものは、嫉妬の原因をはつきりと突きとめることをしな

い。大抵はうやむやに相手を責めたり、だらしなく相手に當つたりする。それが或は嫉妬といふものゝ、本來の面目であるのかも知れない。

永遠なる良人の苦惱

「妻に欺かれた良人となる！　そんなことがこの私にとつて何の苦にならう、たゞそれがはつきり分つてさへゐれば！　これを聞いて眞先に心地よげに打笑ふ者が、この私であればそれでよいのだ。一體この世の中に、我こそ我が妻を所有する唯一の男だと、確信をもつて名乘り得る者が一人でもあるだらうか？」

これはストリンドベリーの「痴人の告白」の中の言葉である。そしてこの言葉を押しつめれば、同じく彼の戯曲「父親」の中の、騎兵大尉のあの深刻な言葉になるのだ。

「私は自分の子供を連れて、往來を散歩してゐる父を見る時程、滑稽に思はれることはない。自

分の子供、自分の子供と父親が云ふのが分らない。『自分の妻の子供』と云ふのが本當である」つまり父親は精確に自分の子供は持つてゐない。たゞ彼の妻の子供を持つてゐるに過ぎないといふのである。ゲーテもその「徒弟」の中で、父の血統といふものは、「信用で決まる」のだと云つてゐる。

私はこのストリンドベリーの「父親」的思想は、不健全病的な思想だと思ふ。この考へに囚れたら、男性は蟻地獄に落ちた蟻のやうに、永遠に苦惱から救はれなくなる。しかし、生涯の中、一度もこの考へを頭に浮べない男性はまづないだらうと思ふ。この「永遠なる良人の苦惱」に對しては、妻は出來るだけいたはりの氣持を持つべきである。殊に嫉妬深い良人に對しては、出來るだけ疑惑を起させないやう、自分の行動に不斷の注意を拂ふと同時に、積極的にその疑惑を一掃するやうに努めなければならない。

前掲の實例の場合でも、妻は良人の疑惑に對して、終始受身の態度をとつてゐるやうだが、それではいけない。責められる時、潔白さを主張するだけで、良人の嫉妬が納まると、それで安心してしまふのでは駄目である。むしろ積極的に、良人の平靜な時をねらつて、絶えず諄々と說く

やうにして、その嫉妬の理由なきことを悟らせねばいけない。

實家に歸つたのは少しまづいやり方だつたが、今までのこの良人の態度から考へれば、多分その中には、もう一度歸つてくれと謝罪つて來るだらうと思ふ。さうしたらまづ何よりも、酒を飲まないといふことを條件にして、歸るがいゝ。飲酒の慣行が感情を粗暴にし、貞操觀念を痲痺させ、猜疑や嫉妬を助長させることは、確かな事實であつて、この良人の行爲も半ばは酒のさせる業であると思ふ。だから妻と別れないためには、酒と別れさせる必要がある。

愛人の愛は、家庭生活を破壞せねばならぬ程、持久的のものでない場合が多い。大抵の戀愛は二年か三年經てばさめるものだ。酒から暫く遠去かつてゐれば、この夫にも、一時的な愛情のために持久的な家庭生活を破壞することが、如何に愚かなことであるか位は、分つて來るだらう。そこまで良人を連れて行くだけの賢さを、この人妻は持たねばならない。

夫婦幸福讀本

夫婦だけの生活

人妻の敵は何處にゐるか？

「戀の世界は、總て悲しい物語にみちてゐます。」

と、フランスの文豪が、ある小説の中で云つてゐるが、それにもまして、樂しかるべき夫婦生活は、私には、往々にして、

「人妻（結婚）の世界は、總て悲しい物語にみちてゐる。」と思へる場合がある。わが戀の物語が悲劇に陥入つて、どうしても堪えられぬならば、カーテンをしめて、戀人から身を隠せば、その進

展は喰ひとめられるであらうが、人妻の悲劇は、自分の横に良人がつきまとつてゐる。たとひ、實家へ逃げ歸つたとてそれで萬事終るものではないのだ。

かゝる不幸を洩らす婦人からの手紙は、相當に多いのだ。

『(前略) 先生の「現代人妻讀本」を毎夜樂しみにして讀んでゐたものでございます。あれには、良人の横暴や浮氣のことが書れてありまして感謝してゐるのでございますが、人妻の自由についても、お考へをのべて頂きたかつたと思ふのでございます。

私は結婚しまして、もはや五年、二人の幼兒すら抱へてゐながら、いつそのこと子供を殘して失踪してしまはうかといふやうな、無分別な氣持に追ひやられることが屢々ございます。

それと申しますのは、良人の徹底的な封建主義的な感情で家庭の一切が支配され、いえ、蹂躙されてゐるからでございます。良人は三十七歳、某電氣會社の課長です。會社ではかなり評判もよく從つて交際には派手に金をつかつてゐるやうですが、一旦家にかへると財布の紐を締めて、電氣、瓦斯、米屋の支拂ひまで一切自分でやります。人妻としては、大變手數がかゝらなくてラクなやうに思はれるかも知れませんが、實は逆で、八百屋へ大根一本買ひに行つても、「いくらだ

?」「五錢です。」「高いぞ、市場へ行けば、もつと大きいのが、二つで六錢だぞ。」とガミガミやられます。うつかり便所の電氣などをつけて忘れてゐると、罰金として五十錢もひかれます。毎月私の小遣の分として頂くのは、僅かに五圓で、(會社では百三四十圓は貰つてゐるらしいのです)その中から、罰金をとられたり、朝は朝で、六時におきないと、何分おくれたら、何錢差し引くと云はれたりして、子供を寢かしつけてゐても、もう心配でおち〳〵とねむられません。水を入れて御飯を炊かうとすると、ガスが勿體ないから、炭火でお湯にしてから入れて炊けとどなられたり、あんまり云はれるので、却つて、へまばかりするやうになり、益々どなられるので、このごろでは少し頭がへんです。そして、私へ來る手紙は、一々開封して、內容を點檢し、翌日漸く渡してくれたり、少し疑問に思ふと、切手の裏まで剝がしたり、手紙を火であぶつたりしてゐます。私は別にやましい事もありませんし、第一こんなにこづきまはされてゐては全くやり切れません。

出張で良人の不在のある夜、夜つぴて、泣いて考へたのですが、この生活は、このまゝつゞけるべきものかどうか、娘時代の朗らかさは、鏡に映した私の顏のどこにも見當りません(後略)』

この手紙は、明らかに男性の暴虐を訴へてゐる。古來わが國の家族主義の良風の中に、陰にこ

の家長の横暴性を培養してきたが、これを現代で繰りかへす男は、あまりに時代を知らぬこと甚しい。可憐な人妻を陋屋の奥で泣かしめて、自ら恬として恥ぢざる男性は、近代人の資格がない。男性對女性は、あくまで對等平等の權利のもとに置かれねばならない。家庭の眞の幸福は、天秤の如く、良人と人妻の皿に同量の權利と責任の荷重を載せなくては、平衡を保てないのだ。

しかるに、頭髪を何やら型と云ふ新しい形にわけてシネマやレビュウを語り、ダンスホールやバアをまはり歩いて、その場、その場の女性に、「貴女の眼は、世界にまたとない寶石だ。」と、齒の浮くやうなことを云ふ男性にして、しかも、一旦家庭に妻を迎へ入れると、忽ちこの横暴性を發揮して、

「妻は、家庭の奥の置物なり。奥でぢつとしてゐれば奥さまと云ひ、臺所にゐれば御臺所と尊稱される。」と云ふやうな説をでつちあげて、得々としてゐるのがある。

面白いスケツチドラマがある。ある青年が少女を戀してゐた。いつも誘ひに出かけるが、三度に一度はどうやら遊んで貰へる。すると青年は大變な喜びで街へでると一番立派なタクシーを呼びとめて、値切らずに、一流のレストランに乘りつけて、山海の珍味を御馳走する。「あなたは、

入江たか子より美しいです。」と絶讃する。

「男子は、女性の美德を尊重し、もつと大切にしなければいけないと僕は思ふ。」さう云つて、料理が終はると、氣前よくチップを拂ひ、さて、芝居見物に出かけて、「特等はいくら、四圓八十錢か。おい、もつと高いところはないか。」と切符賣りに胸を張つてみせたりする。

自分はこのやうに女性を大切にすると云つて、さて結婚するとその女が、「ねえ、日比谷劇場へ一度だけ行かしてね。」と云ふと、「うん、あそこは五十錢だ。高いな。それより淺草へ割引から行かう。二十錢で大抵みられるよ。」と云ふ風にすつかり變つてしまふ。

かう書くと、女性の自由を奪ふ、その當面の敵は、男性だと早合點する人もあるだらうが、果して、女性の敵は何處にゐる？　と云へば私は女性の敵は斷乎として、女性の内にあると云ひたいのだ。これは一應若い人妻を侮辱してゐるやうに思はれるか知れないが、樂しかるべき結婚生活の崩壞は、實に、女性が、一般男性とはいかなるものか、その心理性格、その生活意慾、その思想感情、その教養や經濟的條件を見極はめなかつたところから起り、又女性自身の複雜な心理、性格、趣味とつき離し、相對照して考へぬところから起ることが多い。眞の結婚の幸福や人

妻の自由といふものは、この大きな氣持でつき離して、複雜極はまる男性對女性の楯の兩面を知ることによつておのづから獲得できるだらう。

人妻のタイプ

人妻は、先づその男性の性格を見拔かねばならない。現代の青年は、仕事に對して、ドン・キホーテか然らずんばハムレツトである。ドン・キホーテ型の青年と云ふものは、流行語で云へば、心臟の强い男のことだ。猪突猛進するものを云ひ、ハムレツト型は、懷疑に陷入つて何事にも苦悶し逡巡してゐる青年を云ふ。これは仕事に對する男性のタイプであるが、スタンダールの說に從へば、對女性の仕事となると、ドン・フアン型とウエルテル型が存在する。ドン・フアンは社交的で尊重される種々の才能、卽ち驚くべき勇氣、盡きざる才智、潑剌、冷靜、愉快な機智を持ちながら、他面女性を敵と考へ、あらゆる女性との戀を享樂したい性格の持主である。これと反

對に、ウエルテル型の青年は、終生その一つの戀を、月の光る森のかげよりも美しく、甘く浪漫的な印象に刻んで、その唯一の戀を享樂するのである。

しかし、現代の世相は、青年をこの四つ、ドン・キホーテ、ハムレツト、ドン・フアン、ウエルテルの性格の混合したタイプに仕立てあげてゐる。例へば唯一の戀に惱み、懷疑を抱きながら、しかも月の光よりも美しく戀を感受してゐるハムレツト式のウエルテル型がある。と同時に、逆に、ドン・キホーテ式のドン・フアンもゐるのだ。

かやうな男性の性格は、彼と距離をおいて接觸するうちに、早く見破らねばならない。そして、尙相手の男が、こちらに對して、どんな女性であることを欲し、又何を望んでゐるかも知らねばならないのだ。

女性のタイプを分類するとかなり數多くなるが、大別すれば賢母良妻型と娼婦型及びその中間の型となる。そして、人妻の大部分は誰しも賢母良妻型である事を望み、娼婦型のコケツテイシユを輕蔑したがる。これが間違ひである。人妻の危機や愛情の衰退はそこに起ると云つていい。

先づ手近な男の友達にきいてみるがいい。

「情熱のカルメンが好きか、受難のテスか、薄命のオフエリアか、男を裏切つた風に裝せて淋しく死んで行くマルグリットか。」

男は、いろ〳〵の理窟をつけて、體裁のいゝ返事をするかも知れないが、心の奥の一部に、情熱の美姫カルメンの抱擁も滿更悪くはない、と思つてゐるのに違ひない。その證據に、あれほど子女を昂奮熱狂させるターキイに熱狂して結婚したがる男は尠い。クララ・ボウ、デイトリツヒの人氣はその演技より、もつと男に迫る別の魅力による。女自身がターキイに熱狂するやうに、自分の良人も同様にターキイが好きだらうからと思つて、彼女が髪を刈つて、ターキイのやうな恰好をし初めたら、離縁をされるかも知れない。

「英雄色をこのむ」すべての男性、又しかり。意識して表面に見せると見せざるとにかゝはりなく、男は女性の「女らしさ」を欲してゐる。

ターキイのすきな人妻の嗜好が、その儘良人の嗜好であり得ないことに注意すべきだ。そして人妻は、少し距離をおいて、男の感情の動きを讀みとつて、それに應ずるやうにしなくてはいけない。

良人がいま欲しがつてゐるものは何か。

良人がもう生活に痩せた花嫁をみたくないと思つてゐるときは、家庭もまた、人生の舞臺の一部であると心得て、盛裝をすべきである。特に寢室では、それが大切だ。糟糠のやつれた良妻より、くだらぬ賣笑婦のコケツトリイに男の心はとかくひかれ勝ちである。私の知つてゐる人で、結婚までは散々に遊んだ人がある。それが結婚すると同時に、ぴつたりと悪い遊びをやめてしまつた。病氣でもしたのか、女房がこはいのかと思つたら、そのどちらでもない。女房が、藝妓などよりずつと魅力があつたからである。

その奥さんの苦心談をきくと、良人の氣性や嗜好をのみこむのに人知れず苦心し、良人が、けふは藝妓をよんで遊びたいと思ふときは、丸髷に結つて純日本風のお化粧をする。バアへ行きたいと思ふときは、逸早く洋裝になつて、酒をすゝめると云ふ風に、家庭生活に變化をつけた。この頃では、この良人は、稀には友人に誘はれて、酒場へ行くと、

「バアの酒は馬鹿らしく高くて、しかも話相手の女は教養がない。チツプをおくのが勿體ない。」

とあたりかまはず述懐して、匆々に家へ駈け戻つてしまふさうである。

これなどは、最も難物の良人を操縦して、一家の幸福を作つたい〻例であつて、冒頭の良人の横暴に悲しむ婦人の訴へとは、天と地の隔たりがある。もし、この變裝夫人にしても、放蕩好きの亭主に、自分の勝手氣儘の意志で對してゐたならば、或ひは既に結婚上の危機に見舞はれてゐたかも知れないのである。

ともかく、婦人一個人の自分勝手な判斷や氣儘な意志だけで、相手を洞察することなくして、行動をとれば、尠くとも龜裂ができ、更に衝突は免れ得ないであらう。

妻は馬鹿利巧に

古來名君は家來をこき使はずに、自分が使はれるやうにして家來が自然に働くやうにしむけた。遊びの名人は、自分がお客であつても先づ相手を樂しく遊ばせ自分も樂しむのである。妻對良人の場合も同樣で、決して自分だけ家庭内で都合のい〻やうに振舞つてはならない。先づ相手

が家庭内で氣持のよくなるやうに仕向け、その報酬として、自分も氣持よく、從つて一家波立たず平和になるやうにつとめなくてはいけない。

これは、妻が、心からの馬鹿では出來ないし、利巧すぎてもいけない。冒頭の手紙の訴へにより男性は、舊式な封建制度の意識にみちた排斥すべき男のやうにも見えるが、また一面良人は大變に細かすぎる利巧な男であり、それに對しては妻は多少鈍であるのではないかとも思はれる。

普通の家庭婦人は、利巧すぎることも馬鹿すぎることも、あまり感心したことではない。私は、かねてから婦人を『利巧利巧、利巧馬鹿、馬鹿利巧、馬鹿馬鹿』の四つに分けてゐるが、私は、この中で「馬鹿利巧」を一番推奬したいと思ふ。「利巧利巧」ほど厭味なものはない。「馬鹿馬鹿」ほど腹立たしいものはない。人妻たるものは、すべからく、馬鹿のやうに見せて、眞實は細く計量してゐる利巧な女——即ち「馬鹿利巧」で家庭を處理して貰ひたいものだ。

劍道の達人は、「皮を切らして骨を切る」と云ひ、巧い外交は、「欺されるとみせて欺す」——家庭内でも、この位のかけひきがなければならぬ。

とかく、教養のある女は、鼻にかけて、良人に不愉快を與へる。良人を組みしくことは、現代

の少し利巧な女性には容易な事かも知れないが、むしろ組みしかれてゐるごとくみせかけて、とつそりと一本逆手をとつてゐた方が賢明である。その方が、女に深みがある。馬鹿利巧である限り、良人は、そとで遊んでゐても、「うちの女房は、可愛いゝ女だ。」

といふ感情に統制される。

こんな場合に嫉妬は禁物である。男をその赴くがまゝに行かしめて、何知らぬ顔でゐて、すべてをちやんと知つてゐることほど、良人の強敵はない。強い嫉妬で向かつてくる女の方は、裏も腹もないから良人には却つて御し易いのだ。

まして、良人に別に嫉かれる筋合もないとき、町内で知らぬは女房ばかりと思つて、

「あなたは、このごろ、誰々さんと仲がいいつて大評判よ。」

などと嫉いたりするのは淺墓である。何んでもない女性との問題で、傍がやいたりした爲に、初めてお互に相手を意識し出して、ほんとうに嫉かれるやうな立場になり、却つて奥さんの方が追ひ出されてしまふことは、世間にはよくあることである。

「あいつは、可愛いゝ奴だ。」と良人におもはせるのに、特別なトリックを用ひる必要はないが、

ただ甘い顔をしてゐるだけでは、床の間のフランス人形と變りはない。「可愛いゝ」と云はれる内容を伴はねばならぬ。それには、家庭に於て、妻は、奴隷の如く默々として働いて、默々として眠つてゐるだけでは出來ない。

愛情は小出しに

良妻型とコケテイツシュとは、臨機應變に現はすべきだが、明朗や機智で家を明るくし、いつも良人の影につき添ふやうに心がくべきである。しかも、「鳩に三枝の禮」あり「三尺下がつて師の影を踏ま」ざるごとく、妻たるものも、また良人の前に出しやばらずに相手の心を讀みとつて動くべきである。

ともかく、家庭は、晝間の戰場から戰ひ勞れて戻る良人にとつて慰安の席でなければならない。そこで、妻が悋氣の角を生やして待ち伏せてゐられたら、たまつたものではない。身に後ぐらい

覺えのある良人もない良人も、他の枝へ慰安を求めて飛び去るだらう。良人が明らかに浮氣をして戻つて來たときの妻の態度こそ、良人の氣持を決定させる一番大事なものである。

ガミガミと頭からやらず、またメソメソと泣かず、いつもとかはりなく笑顔で、やさしく迎へることほど、良人の苛責を強ひるものはない。

「さうやさしくすれば、改悛どころかかへつて、いゝ氣になつて同じ行狀をつのらすばかりです。」

と訴へねばならぬほどの良人だつたら、潔よく離緣すべきである。

良人の愛情

こゝで良人の愛情が問題となつて來るからだ。良人は果して、自分を愛してゐるかどうか。どんな浮氣でも、花から花へ移るその場限りの浮氣ならば許される。良人の行動が、計畫的のものであり、もし、自分に全然愛のないものだつたら、深く考へなくてはならぬ。

大抵の良人は、一日位家へ歸ることを忘れても、別の家の床の間をみて、我が家の床の間を思ひ出すものだ。或ひは床の間のないところへ行つてゐたとしても、我が家の床の間は忘れることができないものだ。この床の間は、家の女房のことだ。

必ず家へ戻つて來る。その時、良人の心も一緒に戻つて來たかどうかは、そつと、しかしはつきりと確かめる必要はある。

妻のゐる家庭が、單なる「無料宿泊所」である家が稀にはあるが、「無料宿泊所」であることを平氣でゐる妻は、妻としての資格がない。

「全き夫婦」は、愛に初まり愛に終はらねばならないからだ。運命論者や占者の說く合性の問題に、拘泥して、ひのえ午だから、又五黃の寅だからと云つて、自らの性格をくらく歪めることは近代的でないが、良人と自分とが、最初から趣味も一致せず、性格も敎養も喰ひ違つてゐて、愛する事が出來ないならば、結婚の悲劇の深くならない中に、誤ちのないやうにその處置を考へるべきだ。愛のない結婚ならば、一生燃えない蠟燭をともさうとして無駄な努力をしてゐるやうなものだ。

夫婦の危機は、倦怠期以外にでも、絶えず襲ひかゝる。その場合に、これを貫き通すものは、たゞ「愛」のみだ。冷静にその處置を誤らぬやうにするのには、女性の敵は男性であるといふ謬見を捨てゝ、男の心を早く知ることである。

女が、「男を知る」といふことは、夫婦の交はりを示し、これが新しい人生生活の第一歩となる。こゝで戀愛の上なり、見合ひの上の氣持が夫婦愛となる。知ることによつて、更に深く男が何を欲してゐるかを察し、程よく與へると同時に、男の邪悪なほしいまゝの慾望は適宜に統制をしなければならぬ。

男は、家庭に於ては、子供と云ふよりむしろ坊やのやうに、いろ〳〵と駄々をこね、無理を云ふ。

愛情の絶對の拒絶はいけないことだ。しかし惜しみなく與へてはならぬ。相手は更に上の愛情をのぞむ。與へつくすと他へはしり易い。だから、小出しに與へるべきものである。「人妻は、いつまでも、初夜の花嫁のごとく羞恥をもて」といふのは、右のことを別の言葉で云つてゐることだ。

かくの如く、犀利な頭で、テキバキと處理しながら、妻はあくまで馬鹿利巧でなくてはいけないのだ。

夫婦間の不和

理想の愛人・理想の良人

理想の愛人は、必ずしも理想の良人ではない。だから、こんな事を訴へてくる婦人もあるのだ。

「結婚するまでは、とても妾に親切にしてくれたのですが、結婚すると忽ちてのひらをかへす、やうに、がらりと人が變つてしまひ、暴虐の限りをつくすのです。」

世の中には、こんな男性もあるのである。こんな男にぶつかつた女性は災難であるが、それは一二の特別な場合だけにあてはまると思つたら大間違ひで、大抵男は、結婚すると大なり小なり

暴君となるものである。

「そんな約束ではなかつたのですが、結婚したら俄然豹變して、これをしろ、あれをやれと無理難題をふつかけます。いつそ飛び出して實家へ歸らうと思つた事が、何度あつたか知れません。しかし、一旦家を出て嫁いだからには死すとも歸るな、と父に呉々云はれて來てゐますし、今更家へ戻つたとしても、出戻りとして後指をさゝれるばかりです。それを思へば、良人の無理位は、死んだ氣持で從つてをればなんでもありません。」

この手紙の差出人の良人は、結婚前、「貴女のためならば、僕の一命を捧げます。」と求婚をつゞけ、婦人もそれほどならば理想の良人であると思ひ、その熱意に動かされて、兩親の反對を押し切つて、結婚までしたのだが、この結果となつてしまつたといふのである。

理想的な良人と云つても、理想といふものは、數かぎりないことだから、そのすべての條件を滿足させることは難しいと思ふ。

「こちらだつて、理想的な人妻ではありませんから、あらゆる條件に合致するやうな理想的な相手を求めるのは、少し蟲がよすぎると思ひます。救はれない缺點だらけのものは、排撃すべ

きです。しかし理想的とまで行かなくとも理想に近い相手であれば、それでまあ自分と分相應であるから、理想的だと思はねばいけません。」

かういふ考へ方を持つ賢い妻であれば、少しの良人の無理位は、我慢出來る筈である。戀愛の期間に於ては、男女ともなるべく自分を美しく、末はえらいものになるやうに思はれやうとつとめてゐるから、比較的あらは出さない。こんなとき、迂濶にも、あらをさらけだすと失戀の苦杯をなめねばならぬ。

レイモン・ラディゲは、「ドニイス」と云ふ小説の中で、早熟な少年が美しい妙齢の婦人と海邊の岩蔭で逢曳するところを、蠱惑的な筆で描寫し、その美女のあらゆるものに、少年の心は搖れおの〳〵き、戀の美酒に醉ひしれながら、最後に突如その戀が、投げつけた玻璃器のやうに微塵に碎け散るのであるが、その戀ざめの原因を、「ああ、知らなんだ。美しい彼女の寢顔から、あんな大きな鼾が洩れあがらうとは。」と結んで、戀に陶醉した少年が、初めてきく女の鼾聲によつて、女から離れて行く心を描いてゐる。

このやうに、はりつめて戀をしてゐる間は、お互に嫌はれまいとして、精一杯の努力をするか

ら、けつして、地金を出さないのだ。(そこに戀の昇華作用が行はれて、若い人々を人格陶冶の方向へ導くものである)地金を出したら、戀は消え去るだらうが、結婚してしまつたならば幻滅の悲哀だけで離婚といふ大きな形式の變化を斷行することがない。だから、男性が安心して、横暴になる原因の一端は、結婚の形式の中にあるのだ。

つまり、戀愛の場合は、男性女性は五對五、場合によつては、男の方が跪いて嘆願したりする位だから、七對三位であつたり、稀には、一對九、零對十などといふのもあるだらう。これが結婚すると、五對五どころか、七對三のものは、三對七又は九對一と、斷然男性側が旗色がよくなるのだ。

「結婚するまでは、高價な舶來の香水を贈つてくれたりしたのですが、良人の近頃の變り方といつたらありません。日常生活品すら碌に買へない始末で、お恥しい話ですが、婦人に必要な脱脂綿すら買つて貰へない月もありまして、泣いてたのむと、良人は『贅澤云ふな。一體お前は誰に養つて貰つてゐるか知つてるか?』と大聲でどなるのです。」

最も愛すべき妻を、女中代りに、又は未だに奴隷視してゐる良人があるが、これは救はれない。

妻は、奴隷でもなければ、女中でも下男でもない。一個の人格者である。良人との間は、賣買又は雇傭の契約によつて一緒にゐるのではない。良人のみが、妻を養つてゐるとは云ふことはできぬ。共稼ぎの場合は別として、會社で良人が働き、その得た金で、妻が家事をきりまはしてゐるのに、どうして男だけが威丈高になつて、「お前を養つてゐるのは誰だと思ふか？」

と怒鳴ることができようか。夫婦は、五對五の平衡狀態にあつて初めて幸福な生活であり、完全な夫婦である。良人が暴君である原因は、未開の時代に、强力な男性が、美しい娘を、掠奪して來て、男の心だけを滿足させてゐた奪略結婚の名殘りであるが、こんなことを、今日でも實行してゐる良人は野蠻人である。

これからは、女性の側に、良人の選擇權をより多く與へていゝと思ふ。お前は、おれのお蔭で餓死しないですむのだから、有り難く思へ、などと云ふ良人こそ慚死すべきであるが、世の中には、まだなか〳〵かういふ男が多いのだ。

女の覗かれぬ世界

このごろでは、若い女性の中に、男以上に、酒をのみ、器用に煙草をくゆらすものも見受けられるが、昔は、飲酒喫煙は、嚴格な家庭婦人の知るものではなかつた。

だから、新婚早々良人が前後不覺に泥醉して家へ送り屆けられると、大抵の人妻はその取り扱ひ方に當惑してしまふ。酒は、氣の弱い男でも暴君にさせる。

良人の飲酒で泣かされた人妻の物語は、數限りがない。おつきあひ程度の酒ならばよろしいが、大酒は、惡質を子供にのこす。酒はまた外の女性その他不善の行動への誘ひの媒介になりやすい。外の女性その他不善の行動の世界は、人妻の覗かれぬところだから、妻としても防禦の方法を簡單に見出すことができないのである。これからの女性は、今までの婦人には覗かれなかつた世界もちやんと知つておく必要があると思ふ。

夫婦喧嘩と女の武器

どんなに仲のよい理想的な夫婦でも、一心同體のごとく、お互が物も云はなくとも感でわかるやうになるのは、尠くとも七八年はかゝるやうである。

まして、お互を價値以上によいものに裝つて出來上つた戀愛結婚や、腐れ縁でなつた結婚などでは、食ひ違ひの生ずるのはやむを得ないことである。だが、その爲に持ち上がる夫婦喧嘩は、あまり歡迎したものでない。夫婦喧嘩は、家庭内に瞬時的にまきあがつた暴風であることは否めないが、こんな暴風でお互が傷つくことは愚の骨頂である。

しかし、數多くの餘震があつた後にこそ、初めて大地も安定するやうに、嵐の通過することによつて、夫婦の愛情は一層緊密になる場合がある。また逆に一度の爭ひが、終生二人の心を近づけないものにすることもあらう。

お互の心に何んの含むところがないならば、夫婦喧嘩にはならない。愛情濃やかな夫婦に却つて爭ひがくりかへされることがあるのだ。

「私の家の夫婦喧嘩は、この界隈の評判で、これはお互に少しも愛がないからでございます。昔は、この良人を愛してゐましたが、かう喧嘩をくりかへしてゐる今では、憎しみのみであります。」

この訴へは、愛のない爲の爭ひのやうであるが、「憎しみ」は、愛の變形であることに氣づかねばならぬ。

夫婦喧嘩の攻防戰に用ゐる女性の武器は二つある。一つは男の暴力を壓倒する策戰的暴力と、他は涙の戰術である。暴力に對する暴力は、餘り喜ばしい結果をみないであらうが、涙こそは、女性に與へられた唯一の武器である。これを活用するときは、人妻の最後の勝利となる。つまりいさかひをして、負けて流す涙のいぢらしさが、逆に良人の兜を脱がす結果となるからだ。チェホフの小説の中の文句ではないが、「可愛い奴だ！」良人にこの心を芽生えさせたらもう勝ちだ。女性は、どこまでも女性らしい武器をもつて戰ふべきである。

三角關係と愛情

戀の三角關係は、あらゆる詩文にうたはれて、不朽の傑作をのこしてゐるが、現實にこれと直面した場合には、これほど深刻のものはないのだ。

「まだ良人と結婚をしない前、良人はわたくしと逢ふ他に、他の女性とひそかに逢つてゐました。それが結婚といふ重大な問題にぶつかつたとき、良人はすべて決心してその女とは逢はぬと固い誓ひを立てました。結婚後まる三年は喧嘩らしい喧嘩一つせずに平和にすごして參りましたが、このごろの良人の樣子がをかしいのです。つい最近になつて、隱された女からの手紙を發見したのでございます。きいてみると、實は、三年前の女が、家が沒落してあるバアに出てゐるのに巡り合つて、その女を憐れむ心から、時々逢つてゐるにすぎないと、素直に申すのですが。云々」

憐れみ（同情）で良人が、女に近づいてゐる場合は、やはり危險である。素直にすべてを語つてくれた良人には感謝すべきである。良人といふものは、智謀策略にたけてゐて、中々眞實を白狀しないものである。

良人のその女への同情と自分への愛情をひそかに秤にかけて測り、萬一の場合に備ふべきである。

次から次へと花の間をとぶ蝶のやうに、輕い浮氣ですまされる場合は、妻としては、まだしも心安い。どんな人格的な良人でも、百人の中九十九人までは「妻以外の女にふれはせぬ」と自分の妻の前に云つてゐるとしても嘘である。しかし、妻は、

「他のあらゆる女に背かれても、妻の懷中へだけは安心して歸れる！」

と云ふ心の安樂所を良人に與へておく必要がある。

もし假りに、良人の浮氣が相當大がゝりでも、家庭と云ふ船が難破しない限り、離婚などを考へてはならない。良人の性格や興味と合致することを考へ、仕事のよき理解者となるやうにつとめることだ。

良人に他に戀人ができた場合、妻の方も對抗的に戀人をつくつたら、浮氣が防止出來るやうに、考へてゐる婦人があるが、それは一向に效果がない。離婚の原因をつくるばかりで、男の心は、そんなことで素直に戻つて來るものではない。

戀の相手は、實際に窺ひしれないとしても、どんな女であるかを知ることは、良人の心を知る方法である。

男は、案外に、つまらぬ馬鹿なやうな女にひつかゝるものである。その場合に妻は餘りに賢く立ち廻りすぎたと氣付いたならば、少しは馬鹿になつてみせた方がよい。良人を豚や犬のやうに、下等なものゝやうに思ふやうな氣振りをみせてはならない。妻が潔癖すぎることも良人の浮氣を助成させるものだ。

ともかく、三角戀愛どころか四角戀愛でも起り得る現在の社會狀態である。若い女性の遊軍が、社會的地位の安定を得た妻子ある良人をねらつてゐる。大學教授として教養の高かるべき男でも妻子を捨てゝ、若い女に走つてゐる時代である。

三角關係の生じた場合は、その初期に於て、妻たるものは、よく良人とその相手と膝つき合せ

て、お互が傷つかずに、今後惡い結果にならないやうに相談すべきであらう。かういふ場合には、感情だけでなく、理性で物を云はねばならぬ。

つまり、妻は、人妻としての愛情の上で、肉體的に良人を滿足させるものが必要であると同時に、精神的な教養の高さも要求されるのである。

夫婦和合の道

結婚は生涯に一度たれ

夫婦となつたからには、誰しもすぐ別れるつもりで結婚するものはあるまい。嫌ひになつたらいつでも判れませうと云ふ相談づくで結婚した夫婦も、藝術家の中にはごく稀にはあるが、それは一般に推奨できない。

この人ならばと見定めた上でなければ結婚してはならないが、その結婚も二、三年たてば破れるやうな輕率なものでは困る。

破れないにしても、全然違つた生活環境で長じて來た未知の男女が、一つ屋根の下で、唖み合はず平和に暮すことは、むしろ奇蹟であり、これは非常な努力を要することでる。

だが、一旦離婚となれば、婦人の方が條件が一層悪くなるのは、當り前である。男は却つていい條件で新しい相手を見出す場合もあるが、結婚に破れた婦人は、特別に自分に好意を持つ男でも發見せぬ限り、絶對に前よりよい條件は望めない。それどころか、遙かに悪い堪えられない程の條件でも我慢しなければならない現狀である。

女性自身は獨立してやつて行けるだけの經濟的背景がない限り、絶對に一旦嫁した良人の許は去らぬことである。

ハリウツドの女優連は離婚を日常茶飯事と心得てゐるやうである。また歌手音丸は、遂にその良人と別れたと云はれてゐるが、ハリウツドの女優や音丸になれば、男の力によらずとも獨立生計を立てることが出來るからである。かういふ種類の女性は、妥協せずに自分の配偶者を批判し行動することができるが、古來日本の女性は、反對の立場に置かれてゐて、些細な事ですぐ三下り半を書き與へられたものである。

現代では離婚の條件は、法律で定められてゐるところだが、裁判所へ提起される離婚問題も多くは男の方からであり、女の方から提起するものは、良人の不品行その他相手が良人として資格を缺く點が理由の大多數である。

これをみても、女は七割も八割も損をしてゐることが判る。このやうに男性は横暴である。

最初は共白髪まで連添ふ覺悟で結婚した良人も、結婚後戀人ができぬとは保證できない。

戀人が出來た場合はどうしたらいいか？　再述することになるが、良人の新しい女性が單なる浮氣ですめばお互の傷は輕くてすまされるが、それが全心的な戀愛になつて來たら深刻である。かういふ場合は、一刻も早く妻としての立場から良人の反省を求め、更に進んで、妻か戀人か、そのいづれを擇ぶか決斷させることが肝要である。

某財政研究家で十何遍も女房を取り換へた人がある。これなどは、最初の女性に失望し、新しい女を求め、これにも失望し、更に第三の女に理想を求めて失望するといふやうな具合に、限りなく女房を取りかへて行つたのである。これは丁度芝生が、自分の手近かなところは、疎らで赭土さへのぞいてゐるのに、向ふの芝生は青々としていかにも腰をおろすのに恰好の場所のやう

に見えるが、そこへ行くと意外にも、前よりも芝は疏らで赭土の多いところである。更にその先きをみると、青々とした芝生がみえるので、駈けつけて失望を増す。かうして更にその先きをのぞむと云ふ心理狀態と全く同じもので、これでは、いつまでたつても果てしがつかないのである。

下世話にも「女房と疊は新しい方がいゝ」と云ふが、疊は新しい方がいゝが、女房を新しく取りかへる事は絶對に不賛成である。さういふことは芝生と同じで失望を増すばかりだから、すべきでないことを、賢明な妻は、何等かの方法によつて良人に知らしめねばいけないと思ふ。

女性よ、賢くあれ

溝口健二と云ふ監督のつくつた映畫「愛怨峽」には、都會の悪に染まつて墮落して行く女の赤裸な人生行路が描かれてゐる。最初山中の宿屋の若旦那と駈落して東京へ入る桃割れの女中姿。やがて、男は田舍の親元へつれ戻され、女中は姙娠しゐて子供を産み落す。無情な産婆から里子

へやられて、その仕送りの爲にインチキ酒場へ自ら恥かしい姿をさらす。かうして、都會の泥沼の中に沈み、やがて旅廻りの藝人の群へ投じて、過去の悲しい思ひ出を漫才にしてお客を笑はせてゐる。その中に、男の連れ戻された故郷の劇場へこの漫才がかけられてお客を大いに笑はしてゐるが、座席の遙か後で、不甲斐ない男は、良心の苛責にせめられて目がしらを涙で光らせてゐる。——

かういふ倫落の女の流れ行く姿をみてゐると誰しも慄然とするであらう。女を棄てた男も悪いに違ひないが、女自身も、行動する前にもう少しじつくりと考へ、賢明に自らを處理したならば、かかる悲劇を見ずに濟まされたものと思ふ。

「弱き者よ」の代りに、女性の悲劇には、

「愚ろかしき者よ、汝の名は女なり！」といふ言葉がつき纏ふ。これは人妻は勿論、女性全體の名譽にかけても取り除かねばならないと思ふ。

これとは反對に、私の知つてゐる若い女性でかなり教養も高く、賢明であるが、その爲に、

「今まで心を動かされた男性もなく」また「たとひ自分の方が好きであつたとしても、女性の方

から積極的な表現はできぬから」ときめて、婚期を逸して結婚する意志を放棄してゐる人がある。かういふ女性も亦不幸である。かうなると賢明であるかどうか、疑問である。

何故ならば、彼女が、獨立的の婦人としての特別な準備、例へば、小説家になるとか、洋裁師、美容師になるとか、獨立できる目標を持たずに、その日ぐらしのさゝやかな仕事だけしてゐるだけでは仕方がないからである。

良人の暴力を封じるには

男はよく不用意に、「女なんて」と云ふ。

良人は、「女房なんて」と云ふ場合がある。

この言葉は充分に慎しんで貰はねばならない。

「女なんて」「女房なんて」——と云ふだけではユウモアの含まれた輕い文句のやうに思へるが、

それで安心してはいけないのだ。男性の横暴は、不用意な言葉の中に現はれてゐる。

「女なんて」の言葉の下にどんな言葉がつゞくか。

「女なんて、尊敬できるものだ」

などとは決して云はない。

「女なんて、馬鹿らしいもんだ。つまらぬもんだ。欺き易いもんだ。」といふ風に、つゞくのである。

不用意にも良人に、こんな輕蔑の言葉を吐かせないやうに心を配る必要があると思ふ。

良人は、こんな言葉だけでなくて、もつと形に現はして、暴君振りを表現するものである。即ち、時によつては、腕力を振ふ。

この暴力を發生前におさへる方法は、人妻に唯一つしか殘されてゐない。それはかう云ふのである。

「あなたは、野蠻人や教養の低い長屋の亭主と呼ばれる人のやうな暴力は、決してふるはない方だと信じてゐます。」

そして、心からそれを信じてゐるやうに良人に思はせておけば、教養のある男性は、腕がふるへないであらう。

また、無暗に人前で妻をどなり散らすやうな良人がある。これは實際他人には、見ぐるしいものだ。

外國では、夫婦仲のどんな惡い男女でも、人前ではことさらに仲のいゝやうにつくらふものである。その方が傍の人が安らかな氣持でをられる。

外國の映畫で、汽車の中で大いに喧嘩してゐた夫婦が、自分達の席に他人が坐ると忽ち態度を一變して、いたはり合ひ、塵を拂つてやつたりしてゐる。そしていかにも圓滿らしくみせてゐるが、前の客が立ち去ると、再び猛烈に戰鬪を開始するのを見たことがある。

人前ではあくまで良人の暴君振りは慎んで貰ひたいものである。

「そして、腕力に訴へなくとも、お互に精神に異狀のない人間の筈ですから、よくよく話し合ひませう。」

そして腕力沙汰は、文明の恥辱であることを良人に知らしむべきである。

良人の心理を摑め

また飜つて考へれば、世間一般の良人達ほど氣の毒な存在はない。

朝早く、食事も早々に家をとび出してから、會社へ出ては、上役に氣をつかひ、意味なく怒鳴られ、退社のベルの音がいかに、待ち遠しいか、察するに餘りある。この良人を迎へた我が家が、折惡しく良人の心にそぐはないやうならば、忽ち電雷のごとく怒鳴ることは、稀にあつても我慢しなければならないと思ふ。

若しそこで人妻が反抗的態度に出たら、良人は家を後にして何處かへ出かけるであらう。

そこで、注意しなければならぬことは、家の外には、八人の敵の代りに、八人の妙齡の女人が、良人を待ち伏せしてゐるのだ。甘美な氣持にさせる男への誘惑は、到るところ、口をあけて待つてゐる。良人を外に走らせるのが得か？　人妻として考へねばならぬのは、この點である。

男の心を操縱する知識を、普通の人妻は缺いてゐる。男が、糟糠の妻より、眞實の心のない妖婦に迷ふのは、この間の消息を物語つてゐるのだ。

人妻も一通り良人乃至男性一般の心理を研究しておく必要がある。しかし多く知りすぎることは、却つて不幸かも知れない。だが尠くとも良人の心の動きに氣付かないやうな愚鈍では資格はない。

その邊が難しいところであるが、最も圓滿な家庭生活を築くためには、この中庸の道を人妻は、どうしても學ばねばならない。

體驗から得た反省や、經驗者の言葉、又は書物に就くべきである。

男性は、女性の目からみれば、どうしてこんなくだらない女を好きになれるだらうかと思はれるやうな、唾棄すべき教養の低い女を愛する場合をみかけることがある。

餘りに潔癖すぎる人妻はむしろ反省しなければならぬ。男子は、このやうに、下情的な反面もあるものである。

しかし、男の生活のすべては、そんなところにとゞまるものではない。理想に燃え、高い精神

を求めてゐる反面も必ずあるものだ。

だから、娼婦的な女を要求すると同時に、もつと教養の高い女性にも思慕してゐるのである。

つまり、夫婦和合の道は、こゝにしか見出されないのだ。

精神的にお互が結び合ひ、高められて行く反面と、肉體的に合致する反面との二つが、相合して圓滿な面となるのである。

即ち夫婦となつたからには、お互を何ものよりも深く理解し合ひ、眼にみえぬ手をとつて人生行路をつきすゝむことによつて、渾然と結ばれるのである。

これが理想の夫婦である。そして、この人生の發展に於ても、最も根本的なものは、人格の完成である。夫婦關係も、永遠の圓滿を望むには、妻は良人によつて磨かれ、良人は妻によつて磨かれて行かねばならぬ。

かくて、人格的の結合と、趣味や嗜好の合致によつてこそ、人生に美しき花を咲かし得るものと私は思ふのである。

現代手紙讀本

よき手紙の書き方

心——心づかひが第一

私は、「文章讀本」といふ本を書いたことがあるが、しかし、文章を書かなければならない人は文士とか、新聞記者とか、雜誌記者とか、さういふある特別の人だけで、實生活に携はつてゐる大部分の人は、謂ゆる文章などを書く必要は殆どない。文章を書かなければいけないのは、學生時代に作文や綴り方の時間だけであつて、實際の生活では文章などは書く必要がない。書けば人には見せる必要のない日記くらゐだ。しかし、誰でも書かなければいけない文章が、一種類だけ

ある。それは卽ち手紙の文だ。だから一般の人にとつては、文章讀本などは必要がなくて、手紙讀本が必要だと思ふ。普通の人は手紙さへ書ければそれでいゝのである。

しかし、その手紙といふのがなか〳〵難しい。手紙一つで、人によく思はれたり、尊敬されたり、馬鹿にされたり、甚しきは反感を持たれたり、厭がられたりするやうになるのだ。しかし「文は人なり」といふ言葉があるやうに、手紙は文章の中では一番難しい文章かも知れない。「手紙もやはり人なり」である。

文は人なり、といふ意味は、文章はその人の性格、教養、感情、素質などのすべての表れといふ意味であるが、手紙もやはりそれと同じ意味で、その人の性格、教養、素質、感情その他すべてのことの表れなのである。手紙一つで、その人の教養は知れ、性格の純、不純が知れ、人格の高下が知れ、その人の趣味の高低が知れるのである。

だから、根本的な點からいへば、よい手紙を書くのには、よい人間、教養の高い人間、趣味の高尚な人間になることが必要である。よい手紙を書かうといふのは、つまり自分自身の人格の修養、教養の蓄積をすることになる。卽ち、よい手紙を書く修業をするといふことは、自分自身よ

い人間になるといふ修業とあまり變らないのである。よい手紙を書くためには、どうしてもよい人間にならなければいけない。女性としては、心づかひのやさしい圓滿な婦人になることが必要である。だからこゝでは、そんな根本的のことには觸れないことにする。たゞ手紙を書くについての心掛けとか、心得とか、用意といふやうなものをこゝでは說くのだ。つまり技巧の末の問題を論じてゐるのだ。だから、これだけでよい手紙が書けないとしても、私を怨まないで貰ひたいと思ふ。

前にも云つた通り、手紙の根本は人であり、手紙を書く技巧や心得がどんなによくつても、書く人の人間修業が駄目であれば、いくらやつてもいゝ手紙などは書けないことになる。手紙は、つまり人間同志の交際の一つでもある。つまりその人の對人的な頭の使ひ方、感情の動かし方、物の言ひ方、物を言ふときの態度、動作などの問題である。普通の面會や、應對では、何といつてもその場限りであるから誤魔化しがきくのであるが、手紙は筆蹟が殘り、またハツキリと文字に現れてゐるだけに、こちらの少しの缺點でも眼につき易いのである。それだけに、普通の面會や、應對などよりも、もつと心を用ひなければならない。しかし、一番大切なことは心の問題で

あるから、誠心誠意といふことが根本的なことである。手紙を出さなければならない相手、手紙を出さなければならない機會、さういふ折には、先づ手紙を出すといふことが一番大切なことだ。舊友や、昔の恩人などの祝儀、不祝儀などについて、手紙を出さう、出さうと思ひながら、つい失禮してしまふなどは、一番惡いことである。知人の病氣見舞を、出さう出さうと思ひながら、つい出しそびれるなどゝいふことは、一番惡いことである。戰地へ行つた從兄弟などに慰問の手紙を出さう〳〵と思ひながら、出せないうちに相手が戰死などしたときは、一生の悔を遺すやうなことになるのだ。

手紙は心が一番大切なのだから、書かない以上、その心は、相手に通じつことはないのだ。だから、手紙を出さなければならないところへは、どんな手紙でも、ともかく出すといふことが一番いゝことなのである。どんな惡文でも、片言でも、下手糞の字でもいゝのだ、先づ出すのがいゝのである。自分の惡文や、惡筆を惧れて手紙を出さないといふことは、惡文や惡筆を人に見られることよりも、もつと恥しいことなのである。それは、どんなによい手紙が書ける人でも、出すべき折にもつひぞ出さないでしまふやうな人よりは、惡筆をも揮ひ、惡文をも綴つて手紙を出す

人の方が、ずうつと人間的に立派であり、また人間的に親しまれもすれば、尊敬もされるだらうと思ふ。

殊に、筆蹟は上手、文章もうまい、專門學校を出たやうな女性が、手紙を出さないとすると、あんな字のうまい人が、あんな文章のうまい人が、なぜ手紙をくれないのだらうか、といふ理由で、一そう人から怨まれたり、疎んぜられたりするわけだ。だから、手紙といふことは、女性の心づかひが細かく、いたはりのある思ひ遣り、人の祝儀、不祝儀にすぐ心を動かすといつたやうな優しさが一番の問題なのである。さうしたよい感情を持つた女性ならば、もうそれだけでよい手紙の書き手だといふことができる。

幸、不幸に際して、昔使つた女中などが、たど〳〵しい筆で、慶弔の手紙をくれたりなどすれば、大抵の人は、義理一遍の手紙などよりも、その手紙によつて、慰められたり、または、嬉しくなつたりする。だから、手紙に對して一番必要なことは、心の眞實である。

おちぶれて袖に涙のかゝるとき
人の心の奥ぞ知らるる

といふ歌があるが、手紙に最も必要なのは、この心の奥の奥なのだ。この心の奥を素直に示すことが、よい手紙を書く祕訣だといふことができる。だから、この心の奥の奥に、相手に對する眞心を持つてゐさへすれば、文章も、字も上手である必要がない。どんな片假名で書いても、どんな誤字で書いても、眞心はきつと通ずるだらうと思ふ。一字々々が感情の珠玉として光り輝くからである。

が、しかし、かう云つてしまへば、手紙を書く心得も、技巧も何も要らなくなる。ただこれは眞心といふことがどんなに必要か、といふことを極端に云つてみただけであつて、手紙を書くについて一般的の心掛けや、注意を怠ると、往々にしてその眞心が相手に通じなかつたり、また曲解されたりするやうな場合もある。眞心を曲らずに、素直に相手に傳へるには、やはり多少の技巧も要り、用意も必要なのである。

手紙の種類

手紙は凡そ二つに分けることができる。それは、用のある手紙、用のない手紙の二つである。

用事のある手紙も、知人に出す場合と、何かの註文書のやうに全然未知の人に出す場合と二つに分れる。用事のない手紙といふのはつまり挨拶の手紙である。

また自分の消息を人に知らせる手紙——昔から消息文といふ一種類があるが、つまり自分の近況を知らせると同時に、相手の近況を問ふものが消息文だ。しかし、前にも云つた通り、相手が知人であり、友人であり、親類であるやうな場合は、大抵はこの用事の文と消息文とが一緒になつてゐるわけだ。が、先ず初めに、用事のある手紙について話してみよう。

用事の手紙は、なるべく簡潔なのがいゝ。時候の挨拶なども殆ど要らないと云つていゝ。殊に相手が知人でない場合は、何の挨拶なしでもいゝだらうと思ふ。

が、しかし、取引先などへ出す場合には、相當の挨拶も必要だが、かういふときの挨拶は月並で結構であるし、平凡な時候の挨拶で澤山だと思ふ。その代り、要件はできるだけハツキリ書いて、一度で用事が濟むやうにすることが肝要だ。

昨日も私のところへ未知の人から、「佛像を買つてくれ」といふ手紙が來た。ところが作者の名前などは書いてあるが、肝腎の値段が書いてない。私が佛像などに非常に興味があれば、折返し値段を訊く手紙を出すのだが、さういふものに興味のない私は、折返して値段を訊く氣はしない。先方で値段を明示しておき、それが案外安かつたりすれば、つい買ふ氣持が起るかも知れないのだが、値段がないために、つい手紙はそのまゝになつてしまふわけだ。

金錢に關することは、無心の手紙を出すにしても、金額などはなか〳〵書き難いものであるが、思ひ切つて書いた場合が、却て目的を達するやうなことになるのではないだらうか。金額の明示がなければ、いくら取られるか分らないので、つい應じて貰へないことになつたりすることだらう。例へば、何かの音樂會の切符を友達に頼む場合などでも、三枚なり、五枚なりとハツキリ書いた方が、却て相手の心を氣安くさせるのではなからうか。

女性の方は、一般に遠慮がちで、肝腎なところが云ひ切れない場合が非常に多いが、一體、用事（ビジネス）の場合には、ハツキリと明言して頼んだ方が、效果的ではないだらうか。口で云へない場合に、よく手紙を出す人があるが、それは、口では面と向つてゐるだけに、恥しくつて云へないからであらう。手紙は顔を見合さないだけに、ハツキリ腹藏なく云へるのであるから、用事の手紙は、できるだけ明快で、率直の方がよいと思ふ。

女性の手紙には、用事の場合にも、遠慮や、きまりの惡さが現れて、結局相手に眞意が傳はらず、相手を齒痒ゆがらせるやうな場合が往々あるやうに思はれる。そんな意味で、用事の手紙には、用件とか、それから物の名前、定價、期日、時間などは、最も明確に書く必要があるのだらうと思ふ。

慶弔の場合

慶弔の手紙も先づ用事の手紙と云つてよいだらうが、これは自分の心を傳へることが肝要だ。だから、義理一遍の附合ひの場合には、義理一遍に、平凡に書いた方が却ていゝのである。

例へば、人が死んだとき、自分としてはちつとも悲しくない場合などには、これは普通に悲しみの言葉を述べておきさへすればいゝと思ふ。また、遠縁の八十に手の屆くやうな老人が死んだやうな場合には、實感としてはちつとも悲しくないのに、あまりに誇張した哀しみの表現などをすると、却て可笑しな、不調和なものになるのではないだらうか。

義理だけの附合ひの場合は、義理だけの言葉でいゝのである。が、相手の歡びを喜びとし、相手の哀しみを自分の悲しみとできるやうな場合には、できるだけ自分の心を千切つて、紙に投げつけるやうな氣持で手紙を書いたらよい。さういふ場合は、文句などは考へる必要がない。自分の心に泛んだ感じそのまゝを書いていゝと思ふ。涙が手紙の上へ落ちれば、そのまゝにして紙を替へる必要もないし、誤字があつてもいゝし、書き直しの場合は、書き直しのまゝでもよいのではないかと思ふ。

普通の應對でも、相手によつて禮儀作法が違ふやうに、手紙もやはり相手との親しみや、相手

との關係によつて違ふのは結構なことだと思ふ。友達の哀しみは、手紙の上でも相手の手を取り肩を敲いていたはり合ふやうなところが欲しい。が、平凡な附合ひをしてゐる場合は、たとひ相手の親が死んでも、良人が死んでも、あまり取り亂した手紙などを書くと、却て可笑しくなると思ふ。こちらの自然の感情を、少しでも誇張したり、また少しでも抑へたりすると、手紙が空々しくなるのだ。慶弔の手紙は、こちらのありのまゝの感情を相手に傳へればそれでいゝのである。その中に作爲が少しでもあつてはいけない。

前にも書いたが、慶弔の手紙などは、手紙の文句よりも出すといふことが一番必要なのだ。人間は、自分が嬉しいときには、少しでも多くの人が自分と共に喜んでくれると、更に嬉しくなるものであり、また自分が哀しいときに、少しでも澤山の人が一緒に悲しんでくれると、その哀しみを薄らげることになるのだから、慶弔の手紙などは、できるだけお互ひに出し合つた方が、人間生活を明るくすると思ふ。だから、前に云つたやうに、人の死を聞き、人の祝儀を聞いたときは、先づ〳〵手紙を出した方がよいと思ふ。出さないでおいて、その次逢つたときに悔みを云つたり、慶びを云つたりするのは、隨分氣まづいことだと思ふ。あの人は、私のお父さんが死んだ

ときにも、悔み一つくれないなどゝいふことは、人から買はなくつてもいゝ恨みを買ふ原因にもなる。

義理一遍の關係では、慶弔の文などは短くつても結構だ。告別式などに弔辭の長いのは、徒らに會葬者を惱ますだけであるが、それと同じやうに、肉親の不幸にある人に、ダラ〳〵と長い手紙を書くことなども考へもので、簡單でもいゝから、誠意のある弔辭を一言述べておきさへすればいゝのではないか。が、親友などの身の上に不幸が見舞つてゐるときは、沁み〴〵とした長い慰めの手紙を出した方がいゝと思ふ。

消息文を書くには

消息文は、大抵は親しい間で取り交すものであるが、これは時候の挨拶も、できるだけ實感が出たものでなければならない。月並な文句などを竝べてはいけない。

時候の挨拶をするにしても、自分の身邊の狀況を書くとか、自分の地方の年中行事を書くとかした方がよい。さうして自分の身邊に起つた面白い話、事件などを書いた方がよい。その人と逢つたならばきつとするかも知れないやうな話を、手紙の上で書くべきである。つまり自然の親しみの感じを出した方がよいと思ふ。

例へば、戰地に在る知合の將兵に手紙を出すやうな場合は、たゞの普通の時候の挨拶をして、こちらの無事を述べて、相手の安否を訊くだけでは、甚だ物足りないと思ふ。自分の身邊に起つた事件や、町内や、世間に起つたことなどを、こまゞ〳〵と書いた方が、故郷を偲ばせるよすがになるのだと思ふ。

私は、昨年出征してゐる知人に手紙を書いたが、その手紙のあとに、最近のニュースとしてセンセイションを起したいろ〳〵な新聞ダネを、短く縮めて書いてやつた。すると、その男は返事を寄越して、「あの新聞の拔き書は、シラノ新聞のやうに面白かつた」と云つて來た。「シラノ新聞」とは、御存じの方もあると思ふが、「シラノ・ド・ベルジュラツク」といふ劇の主人公のシラノが、私かに心の中で思つてゐる十數年來の愛人、ロクサアヌを尼寺に訪れて、市井の面白い事

件を讀んで聽かせるための、短い拔き書であるが、戰地に在る將兵などは、新聞が讀めないのだから、新聞に出た面白い事件などを拔き書きして知らせるといふことは、どれだけ陣中の憂さを慰めることになるかも知れないと思ふ。

こちらがみんな無事であるとか、相手の安否を訊くといふやうなことは、必要ではあるが、しかし、それはもう暗默のうちに通じることなのだ。手紙を書いた以上、こちらも無事であり、相手の無事を祈つてゐることは分り切つてゐるのである。それよりは、もつと細かな消息を知らせた方が、相手がどんなに喜ぶか分らないだらうと思ふ。

これは戰地に在る將兵に送る手紙でなくても、平常の知人、友人などの間の消息文でも、珍しい身邊の事件、または身邊の細かい變化などを、お互ひに知らせ合つた方が、一そう手紙が懷しく讀まれるのではないか。殊に友人、知人の手紙など〻いふものは、お互ひに見榮を張らない方がい〻のであつて、お互ひに名文を書かうとしたり、字をうまく書かうなど〻したりすることは感情の自然な流露を妨げて、結局つまらない手紙を取り交したりすることになるのではないかと思ふ。が、目上の人、若しくは義理のある人に對する手紙は、これは文章も心掛けて書き、字も

心掛けて誤字などを書かないことが肝腎だ。さういふ手紙は、できるだけ愼重に、難しく書かうと思はず、平凡に明快に丁寧に、よけいなことを書かないのがい〻のではないか。消息文も、つまり書かないといふことが一番いけないので、どんな簡單なものでも、どんなに書きなぐつたものでも、とにかく手紙を出すことが、出さないよりは遙かにい〻。

字句などの注意

手紙を書く場合には、文句にしろ、言葉にしろ、空覺えのことは書いたらいけない。見よう見眞似で、難しい言葉遣ひをしたり、難しい字を使つたりすると、つい片言や、誤字などを書いて人に笑はれる原因を作ることがある。手紙を書くときは、自分の足を土に据えて書くべきで、背伸びをして書いてはいけない。背伸びをして書くと、心ある人に見られると、手紙がヒョロ〳〵してゐることになると思ふ。

難しい字を書きたい場合は、辭書を引いてハツキリ確めるのがいゝと思ふ。殊に外國語などを空覺えに書くことはいけない。外國語を、たゞ新聞や、雜誌學問で書くと、つい飛んでもない間違ひをして人に笑はれないとも限らない。

紫式部が、十を知つてゐる場合、一をしか知らないやうな顔をしてゐろと、戒めてゐるが、そんなに謙遜する必要はないが、十を知つてゐる場合も、六七ぐらゐだけ出した方が、奥ゆかしいと思ふ。

手紙の中で一番見苦しいのは、自分自身を自分より以上のものに見せようとする努力である。これが一番みつともないことだ。自分を人に偉く見せようと思へば、前にも云つた通り、自分自身の教養を積み、精神を磨くといふ根本的な修業をすればいゝのである。さうすれば「手紙は人なり」で、自然にその人の人格が、手紙の上に輝いて現れる。が、自分がさういふ根本的な修業をしないで、たゞ文句の上だけで偉く見せようとすると、心ある人には、すぐ本體を見破られてしまふことになるのである。

字句と言つたが、字句だけを丁寧に親切に書いたのでは駄目である。やはり心遣ひ、心持その

ものが親切で、やさしくなければいけない。人に對して充分の敬意を持つてゐないと、つい言葉の端々にそれが現れるものである。なほ手紙の中で、第三者のことを書くときなども、充分の敬意を示して書いた方がいゝ。例へば、誰々が、かう云つてゐたといふやうなときにも、誰々が、かう仰しやいましたが——といふやうに、第三者にも、敬意を示すべきである。昨日、私の讀んだ手紙に、「隣の娘が、かう申してゐましたが」といふ文句があつたが、かういふ場合にも、やはり「隣の娘さん」とか、「隣のお嬢さん」とか書いた方が、書いてゐる人自身の人柄を示すことになる。敬語なども、あまりに使ひ過ぎると可笑しいものだが、しかし、適當に使ふと、その人自身の人柄を奥ゆかしく見せるものである。だから、手紙を書く場合などにも、相手に對する敬意は勿論であるが、第三者に對しても、やはりある程度の敬意を示しておくことが大切である。殊に女の手紙は、すべてのものをやさしく書き、やさしく呼んだ方がいゝのである。

それから難しい漢語や、難しい古典的の言葉、謂ゆる大和詞なども、できるだけ使はない方がいゝと思ふ。候文なども、現代の教育を受けた女性にはなか〳〵うまくは使へないものであるから、やはり平明な口語文が一番いゝのではないだらうか。結局手紙といふものは、相手を前に

おいて話す通りに書くのが名文になるのだらう。

宛名書その他のこと

上書の宛名は、なるべく楷書でハツキリ書いた方がいゝと思ふ。宛名ばかりでなく、すべてくづさない方がいゝと思ふ。習字の稽古などでは、いやに文字をくづすことが流行するが、あゝいふ字はもう私は時代後れだと思ふ。私なども、あまりにくづした字は讀めなくなつてゐる。美しい草書は、それ自體としてはいゝかも知れないが、しかし、相手に少しでも讀み難い感じを起させたならば、手紙の字體としては甚だくだらないものになりはしないだらうか。殊に、相手があまり教育のない人なのに、讀み難い手紙を出すなどは禁物である。現代人は、だん〳〵草書から遠ざかつてゆくし、今は活字萬能である。だから、手紙に草書を用ひることは、昔の婦人道の美しい名殘りの一つではあるが、それはよつぽど相手を見てすべきだと思ふ。普通の手紙には、で

きるだけ解り易い字體を使つた方がいゝのではないだらうか。

時候の挨拶などは、なるべく簡單な方がよい。さういふことを、美文調で、長々とやられたのでは、却つて感銘を無くしてしまふ。たゞ、お終ひあたりに『段々寒くなりますから、御身體をお大切に……』とか、いふ文句を書くがよい。

物を賴むときなどの手紙には、あまりお世辭を書いてはいけない。

難しい言葉や、自分に使ひ切れないやうな表現はしていけない。それよりも、素直に、隱し立てをしない樣に、ありのまゝの氣持を書くことが必要だ。さうすれば、その人の素直なことだけでも、相手に認められて好結果を得る。

如何なる場合にも、長いものよりは、短かく要領を得てゐるのがよいと思ふ。然し短かい中にも、相手に對する敬意は忘れてはならない。また、短かい言葉のうちに、相手の心を動かすやうな誠心をこめることも必要である。結局、言葉遣ひや、つまらぬお世辭で相手を動かさうとせず、本當の氣持を、率直に書くことである。

用紙はなるべく、ゆつたりと使つたがよい。一枚の紙に、先方の名前や自分の名前を書き切れ

ない場合は、別に一枚の紙に宛名と自分の名を書いていいと思ふ。

知名の士などに手紙を出して、返事を求める場合、切手など封入しない方がよい。返事を強要してゐるやうで、感心しない。切手を入れる位なら、一歩進んで、返信用の封筒に切手を貼つたのを封入した方が更によい。相手は切手が惜しくて返事を出さないのではなく、面倒くさくて出さない場合が多いものである。

純然たる公文書とか、官職にある人への敬稱は『殿』だが、それ以外は、『様』と書くのが一番感じがよい。もつとも手紙の文面には、その人によつて先生と書いてもよい。たゞ、滑稽なのは先生様といふやうな使ひ方をすることである。

もう一つ、女性の手紙でどうかと思ふのは、『秋雨そばふる孤燈の下にて、A子より、懐しき師の君、B先生へ』などと、思はせたつぷりな書き方をすることである。これなどは、相手の女性が身を動かすたびに、安白粉がぷん〳〵匂つてくるやうで、どうにも我慢がならない。知己や、舊友などの場合でも、あまりかうしたでれ〳〵した書き方はよくないが、目上の人には、絶對に書いてはならない。自分の名前だけを、きちんと書き、宛名にも、せい〴〵『御許へ』程度に、

さつぱりと書くことがよいのである。

それから、相手の名前は、できるだけ丁寧に書いた方が、相手に對する敬意を示すことになる

それから自分の所番地も、つとめて明確に書くべきである。私のところへ寄越す讀者の手紙などにも、筆者自身の所書を達筆で書きくづしておくのがある。田舎には、どう訓むの分らないやうな地名があつて、そんな地名を草書でくづされたりすると、初めて讀む人には、てんで分りはしないのである。私なども返事を出さうと思ひ、相手の所書を見ると、何と讀んでいゝのか分らない場合が非常に多い。書いてゐる當人は、自分の宿所だから、幾度も書いてつい慣れたまゝに書きくづすのであらうが、初めて見るこちらは迷惑千萬である。つい何といふ字か分らないながらも、相手の字を見やう見眞似で引き寫して書いたりする場合は、こちらとしては、とても不愉快である。自分が見慣れてゐるからと思つて、かきくづす、その心無さ加減が厭になつてしまふのである。すべて手紙は、相手が讀むものであるから、相手の氣持になつて書かなければ嘘なのだ。

手紙を差出す場合には――すべて字を書いたものを相手に渡す場合には、相手に讀み易いやう

に、相手の方へ向けて出すのだが、手紙も全部相手本位に書くべきである。つまり相手をまごつかせないやうに書かなければならないのだ。

それから手紙の中では、相手の名前をハツキリ書くと同時に、自分の姓名もハツキリ書くのは勿論だが、親類縁者以外の人に對しては、姓も名も、兩方とも書かなければならない。とよ子とか、政子とか、名前だけ書くのは、あるなれ〳〵しさを示してゐることで、失禮なことだと私は思ふ。

古今模範手紙とその解釋

ほうせう院（嫁する女に對する訓戒）

この、ほうせう院といふ人は、どういふ人か分らないが、この手紙で見ると、如何にも心持の秀れた、物事のよく解つた、やさしい賢婦人型で、この手紙などは、恐らく南北朝乃至は室町時代の手紙であると思ふが、現代にも立派に通用する手紙である。

ふとしてよそへとえ給ふべき事、まことにめでたうおぼえ候。申すまでも候はねども、身もちやさしく、心おとなしやかに、さゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで、はんじやうし給ひ

て、まごひこをやしなひ、わらはが行くすゑをもはごくみ給べく候と願ひ候ほどに、ふでにまかせて申しまゐらせ候。いづれも〳〵、いきとしいけるもの、そのことわりをしらざるものはあるまじく候なり。

「ふとしてよそへこえ給ふべき事、まことにめでたうおぼえ候」とあるのは、不思議な縁でお嫁に行くといふことは、まことに目出度いといふ意味だ。「身もちやさしく、心おとなしやかに」といふことは、これはもう萬代不易の、女性に對する教訓である。

第一、慈悲の心ありて人をあはれみ、むしけだものゝうへまでも、露のなさけをかけまくもかたじけなくも思はゞ、青柳の風になびき、春の雪の梢につもりたるがごとく物やはらかに、人の心をしり、ひがめる心おしなほし、さてまた、心のうちは岩がねよりもかたく、あだなる心ふるまひをきらひ、ひとすぢに心をむけ、賢臣二君につかへず、貞女兩夫にまみえずとくれ〴〵このことわり心にかけたまひて候はゞ、神や佛も、御まもりもおはしましたまふべく候。

この第一の中で、「慈悲の心ありて人をあはれみ、むしけだものゝうへまでも、露のなさけをか

けまくもかたじけなくも思はゞ」といふのは、人間としての心掛のうちで肝腎な事だと思ふ。「露のなさけをかけまくも」は、「かたじけなく」にかゝつてゐる、枕詞のやうなもので、蟲けだものの上までも憐れみをかけると同時に、これを尊重する氣持は、女性の氣持として大切な事だ。人類を愛し、周圍の人を憐れみ、その愛が動物の上にまで及ぶといふことは、女性の根本的の美德である。かういふ人は、女中を苛めたり、輕蔑したりすることはないだらう。「青柳の風になびき、春の雪の梢につもりたるがごとく物やはらかに、人の心をしり」といふのは、周圍の人間の性格や心理を察するといふことで、これは、私など、今までにいく度も說いた事だ。「ひがめる心おしなほし」は、自分が反省して、できるだけ素直な氣持になるといふ意味で、「さてまた、心のうちは岩がねよりもかたく」は、うはべはやさしいが、婦人の貞操といふ點では、鐵のやうに固くあるといふこと、卽ち外柔內剛だ。これも實に婦女子として心掛くべき重要事である。「あだなる心ふるまひをきらひ」は、浮薄な、輕薄な擧動を避けるといふ意味だ。そして何事にも心を專一にし、賢臣二君につかへず、貞女兩夫にまみえずと、くれ〴〵このことわりを心にかけ給はゞ、神や佛も、守つてくれるだらうといふことと、この第一の箇條は、また現代に於ても、婦人に對する

これ以上の訓言はないと思ふのだ。この手紙が、どうして女學校の教科書などに採擇されてゐないか不思議に思ふ。

これでも分る通り、この、ほうせう院の人格、解りのよさは、この第一の箇條に立派に現れてゐるのだが、こんなに物の解つた人が昔ゐたかと感心するくらゐである。

第二に、客人などわたり候はんとき、うちには、いかやうなるむねんの事候とも、いさゝかも、そのけしきを見せず、なにとなきやうにとりなして、たかきいやしきけぢめなく、にほにほと打ちむかひ、春は花うぐひす、夏は卯の花ほと〻ぎす、秋は千種の花月のうはさ、冬は雪霜時しらぬしぐれなどの、をりにふれたるものがたりなどして、いかにもねんごろにとりはやし給ふべく候。されども、あまりに年わかき人のむつまじげなるも、よそめいかゞあるべく候や。たゞなにとなくなぞらへて、かたしのぎなく、あい〳〵といはん事、あらまほしく候。

第二の方は、稍や日常生活に關する心掛けで、これもかなり勝れてゐると思ふ。

お客が來たときには、家事の上でどんなにくやしいことがあつても、その氣色を見せてはいけ

ない。できるだけ自然に接待つて、たとひ身分の上の人でも、また自分より目下の人でも、「にほにほと打ちむかひ」、(これは、にこやかに打ち向ふといふ意味だ。)その折々の物語りをして、如何にも親切に取持たなければならない。しかし、若い者同志が、あんまり狎れ過ぎて、ふざけたりすることは、外の人にどんな風に誤解されるか分らない。たゞ何となく、打ち解けて、萬遍なく應對するやうにありたいものだといふのだ。この第二箇條も、婦人の客に對する作法としては、實に立派だと思ふ。殊に女性の中には、少し目下に對すると威張り返る奥さん達が多いが、かういふ昔の時代に――上下の區別が非常に喧しかつた時代に、目下の者にも親切にせよ、と云ふ、この手紙の主は、實に立派な婦人であると感心してゐる。。

第三に、めしつかふ人に疎略をなし給ふな、おもふやうにならず候はゞ、しのびやかによまひごと、うらみをもいひかはしたまふべく候。それにても、かどなどやうに候はゞ、折檻もあるべく候。それも夫などのみきゝたまひ候やうには、口をしきことに候。いかにみめかたちうつくしきちご女房も、はらをたてたるかほばせは、見にくきものにて候。しかもわかき人の聲だかに候ては、あさましきことにて候。さて〳〵、よまひごとをもきく

まじき人にて候はゞ、こなたへかへしたまひ候はゞ、さのみまた苦勞にもなるまじく候。男女も、あまり短慮に候はゞ、なんもむらいもいでき、めし使はるゝものもたいくつなれば、よそにて悪名をもかたり、のちにはにげ候ものにて候。

よしのなるなつみの河のかはよどにかもぞなくなる山かげにして

此のうたの心は、よどの川は水はやく候、かもは水のうへにすむ鳥なれど、あまりにはやき所にはかなはず、河よどとて、水のよどむ所にすむものなり、いはんや人間は、けはしき所にはながらへがたく候。

第三は召使に對する心掛けであるが、解り易く書くと次のやうになる。自分の召使ふ人を疎略にしてはいけない。また召使が自分の氣に入らないときは、そつと注意をした方がいゝ。しかし、それでもまだ意地張るやうであつたら叱つてもいゝ。が、それも主人の前などでは叱つてはいけない。どんな美しい子供や、奥さんでも、腹を立てた顔容はみつともないものだ。だから、女中などを叱つてゐるところを、御主人に見られてはいけない。しかもまだ年の若い廿歳前後の奥さんが、聲を荒立てたりしてゐるのは淺ましいことだ。そんなにしても、まだ云ふことを肯かない

召使があつたら、それはもう實家へ返した方がいゝのである。若し、相手の召使の男や女が、怒りつぽい人間だつたならば、他所へ行つて悪口などを云ひ觸らすやうになつたり、それからおしまひには逃げて歸つてしまふのだ。だから、召使もあまりけはしく、いら〳〵しく扱ふと、誰もゐつかなくなる。丁度、川水の速い流れには、鴨などは棲まなくなつて、水の淀んだところへ寄りたがるやうなものだ。この道理をよく心掛けて、召使を使へといふのである。この項なども、女中さんなどを使ふ主婦に對する立派な教訓である。主從の別が非常に嚴しかつた時代に、こんなことを云ふ婦人がゐたといふのは、實に嬉しくなるほどである。

第四には、夫婦間の事、たかきいやしきむつまじくあらん事こそめでたく、よその聞えも心にくゝあるべけれ。たとひ萬世をおくり給ひ候とも、いさゝか男に見おとされぬやうに、たしなみたまひ候はん事こそ、なほ〳〵千秋萬歳をたもちたまふべき事にて候。さて〳〵むしんの事候とも、さのみおもひたまふべからず、たゞうきよのありさまを、つら〳〵と見きゝたまひて、心をもみじかくなくすぐしたまひ候はゞ、行すゑもよき事あるべし。うたに、

ことたらぬ世をなうらみそかものあしみじかくてこそうかぶせもあれ
つらけれどうらみんとはたおもほえずなほゆくすゑをたのむみなれば
いづれもみなきこえたるうたどもなり。さてまた、きのありつねの女
かぜふけばおきつしらなみたつ田山よはにやきみがひとりこゆらむ
と詠ぜしは、その世までも、やさしき事につたへ候。さて又、さいみやうじの百首に、
人の妻のあまりりんきのおほきこそふたりのはぢをかくもとゐなれ
此のことわりをげにもとおもひ候。しかはあれど、世になきあつかひ御わたりなど候はゞ、
うらみも述懐をものたまふべし。さあらんには、よそのきこえもくるしからず候。をとこ
にむかひ候て、或は陣立、或はたか野、その外とほ道のくたぶれなどのときは、いかやう
のうらみごとをもいたさるまじく候。その夜は、女なりとも夢もむすばず、ようじんを心
にかけ、人をもいさめ給ふべし。それもあまりことゞ〳〵しきやうに候はんは、けはしく見え
てあしく候。たゞなにとなくあるべく候。
第四は、とれは夫婦間の事を云つてあるのだが、夫婦の間の事は、貴賤に拘らず仲の好いとい

ふことが、世間に聞えても奥ゆかしく思はれるものだ。たとひ長い間一緒にゐても、良人から少しもさげすまれぬやうにすることは、いよいよ永く夫婦間を圓満にする道である。若し無念な事があつても、あまりそれをクヨ〳〵したらいけない。これも浮世の有様と觀念して、氣を短くしてはいけない。辛抱してゐるうちには、將來よき事があるだらうから、といふのだ。
「いづれもみなきこえたるうたどもなり」といふ意味は、どれもみな、尤もな歌といふことである。それから、きのありつねの女の歌は、家を留守にしてゐる良人が、立田山を越えて、外の女のところへ通つてゐるのだが、それを怨みはせずに、立田山を獨り越えて行く自分の良人が、さぞ淋しいことだらうと思ひ遣り、嫉妬の心をおし隱して、良人に對する愛情を示してゐる歌で、さいみやうじの百首の、人の妻があまりりんきの多いのは、ふたりのはぢをかくもとゐなれ、といふのも、尤もと思はせる歌である。
しかし、その「世になきあつかひ御わたりなど候はゞ」といふ意味は、あまり世間にためしのないやうな酷い仕打に遭つたならば、たとへ世間に知られてもかまはないから、良人と戰つてもよいといふのだが、それは良人があまり酷いからだ。それからまた、良人が、「陣立」（今で云へ

ば、軍事上の演習のやうなものである。）に出た場合とか、または鷹狩に行つたり、そのほか遠いところへ行つて歸つたときなどは、どんな不平があつても、決して云つてはいけない。これは良人が疲勞のためにムシヤクシヤしてゐるのだから、さういふときに決して怨み言を云つてはいけない。そして良人が、遠いところへ云つて歸つて來ないやうな「晩は、女なりとも夢もむすばず」――あまりぐつすり寢込んだりなんかしてはいけない。いろ〳〵用心して、家人どもにも氣を配らせた方がいゝ。しかし、それもあまり夢中になつてしない方がいゝ。そんなことをすると、女の身であまりに荒々しく、けはしくなるから、おだやかに用心もし、おだやかに人を戒めた方がいゝのである。

第五に、わかれにししたしき人、すこしものどほに候とて、こなたもなほざりに候はんこと、あら〳〵しきことにて候。

つらきとて我さへ人をわすれずばさりとて中のたえやはつべき
我よきに人のわるきはあらばこそひとのわろきは我わろきかな

かやうなることのはこそ、きゝであるえい歌とおぼえ候。ことさらむつまじき人のそへいけん、又はよまひごとをも、いかにもねんごろにきゝたまひ、よきことをばげにとおもひ、あしき事をもふかく口をしとおもひたまふべからず。

第五の意味は、親友がどこか外の土地へ行つて、さうしてちつとも消息を寄越さないからといつて、こちらも等閑にして御無沙汰をしてはならない。さういふことでは何となくこちらが下品に見える。

この歌の意味は、相手が薄情だからといつても、自分の方でさへ相手を忘れないで親切にすれど、二人の間はいつまでもつゞくだらうといふので、もう一つの歌の意味は、自分がよくしてゐたのに、人が悪いといふことはない。人がこちらに對して悪くするのは、こちらが悪いからだといふ意味である。かういふ歌は、實に讀んでみて讀み甲斐のある歌だと思ふ。だから、親友などからいろ〳〵意見されたり、叱言を云はれたりした場合は、如何にも親切に聞いて、良いことがあつたら尤もだと思へ。また、相手が間違つてゐても、それをくやしいと思つたりしてはいけない。

この第五も、實に人間交際の道を說いて剩すところがない。殊に婦人の愛情ややさしみを持つ

て、人と交際する道を説いてまことに立派な意見だ。この手紙は、まだ第六、第七、第八、第九第十とつゞいてゐるが、第十だけを拔いて解釋しておかう。

第十には、「よそよりいさゝかなるものきたり候共はえ〴〵しく返事あるべし。ようなきものとて、つかひの見きく所にて、うちすて候はん事、むげに有るべきにや。されども、つよくうれしげなるも、いかゞしく候、よろづつゝしみたまふべし。さりがたき用にて、しよまうなど候はゞ、又それはそのものゝあたひほど、あなたへもほどこしたまふべし」とある。これは物品の贈答に對する心掛けである。外から僅かな物を贈つてくれても、「はえ〴〵しく返事あるべし」は、ハツキリと明瞭にお禮を云つたり、返事をしたりした方がいゝ。たとひそれがくだらない物をくれた、といつても、それを持つて來た使ひの前などで、疎略になどすることは絶對によくない。しかし、あまり誇張して嬉しがるのも可笑しい、萬事愼重にした方がよいのだ。

またこちらが是非とも必要なことがあつて、人に何々をくれ、と云つて貰つた場合には、丁度それと同じやうな價のものをお返しした方がいゝだらう。

このほうせう院の手紙は、手紙の文といふよりも、女性に對する立派な教訓であつて、前にも

云つた通り、この手紙が今までにどうしてもつと有名でなかつたのか、私は不思議に思ふくらゐである。實にこのほうせう院といふ人は、心狀の深い、勝れた立派な女性だと思ふ。現代の有名な婦人達の中にも、こんなによく物の解つた、やさしい人がゐるかどうか疑問なほどで、この手紙を掲載したのは、如何にその人の心が文章の上に表れてゐるか、ほんたうに良い人でなければ良い手紙が書けない、といふ二つの例にもなるし、またこゝに書かれてゐることが、現代の女性の心掛けに對する、實に立派な教訓だと思ふからである。

木村重成の妻（良人への遺書）

一樹の蔭、一河の流、これ他生の緣と承り候にこそ。そもをとゝせの比よりして偕老の枕をなして、只影の形に添ふがごとく思ひまゐらせ、おもはれまゐらせ候。此頃承はり候へば、此世限りの御催しのよし、かげながら嬉しく存まゐらせ候。唐の項王とやらむは、世

に猛き武士なれど、虞氏の爲めに名殘を惜み、木曾義仲は松殿の局に別れを歎くとやら。されば世に望窮みたる妾が身にて、せめて御身御存生の中に最後を致し、死出の道とやらむにて奉ニ待上一候。必々秀頼公多年海山の御鴻恩、御忘却なき樣、願上まゐらせ候。あら〳〵めで度かしこ。

長門守重成樣

妻より

この手紙は恐らく嘘であらう。これは後代の人の僞作であらう。唐の項王だとか、和漢の故事を書くなどは、これは嘘の證據だ。妻が一生の別れに、良人へ出す手紙として、こんな空々しいことを書くわけはない。本當の木村重成の妻だつたら、こんな理窟などは決して書かないだらう。こんな理窟を書く女だつたならば、良人が戰死する前に死んだりなどはしない。この手紙には、女性の純情な氣持が殆ど出てゐない。これは後代の人が書いたものに違ひない、普通の手紙でも、こんな手紙を書いちやいけない。こんな實感の伴はない故實などを引つぱり出した手紙を書くべきではないと思ふ。

頼山陽の母（子の世話になりたるを謝する禮狀）

幸便に任せ一筆申上〻〻。時分がらよほど冷氣に移り〻〻其御地どなた樣にも御揃遊ばし御機嫌よく被爲入候事御めでたく存〻〻。久々文して御うかがひも不申上御ぶさたに打過ぎ〻〻。毎事存出候心のうちに、御うはさ申上候ばかりにて、遠方は扨も御うち〳〵敷ものに御座候。御いと樣がたさぞ御いさましく追々御かた付の御支度等嘸々あなた樣御心配可被成とおし計り〻〻。久太郎（山陽）より先月廿三日の書狀さしこし、其節あなた樣へ罷出逗留いたし居候よし。相かはらず御懇意になし被下誠に御ふたり樣共御底いなく御心切になし被下候段申越〻〻。私においても扨々忝なく存〻〻。扨其便のせつは御めづらしきたばこ道具御めぐみ被下、扨々かたじけなくいはひ納〻〻。陽氣なる御品にて別て老人の持候に祈禱に成まし、人々にも新下りと申してへからかし〻〻御事に御

座候。くれぐれも御わすれも不被下御懇もじになし被下候段難有存る〳〵。筆末に相成候へども、長左衞門(小竹)様御始め御子様がたへ宜しく仰せつたへられ被下候様乍憚希上候。先は何かの御禮御見舞旁あら〳〵申上る〳〵。めで度かしく。

葉月六日

篠崎御奥様

賴山陽

賴山陽の母の手紙は、實に立派な手紙だ。賴山陽が世話になつてゐるので、いろ〳〵お禮を云つてゐるところなど、もうその當時賴山陽は四十六歳になるのに拘らず、賴山陽のために辯解もし、執成もしてゐるなどは實にやさしい母性愛が現れてゐる點で氣持のよい手紙だ。

それから向ふからくれた煙草道具を極力褒めて、來る人達にも、大阪からの新下りの品だ、と言つて、見せびらかしてゐるといふ風に、煙草道具を非常に喜んでゐるなども、お禮の手紙としてはい〳〵ことだと思ふ。それから最初に向ふの娘さん達の事を、「さぞ御いさましく追々御かた付の御支度」など〳〵云つてあるのは、如何にも女同士の手紙として立派に實感が通じ合つてゐると思ふ。かうした立派な母親だから、山陽のやうな立派な子供ができたのであらう。

その文句も、女性の手紙としては、漢學者の妻であるだけに、少しやさしみが足りないやうな感じはするが、しかし、快活で、意味がよく解つて、立派なものだと思ふ。

九條武子(年賀狀・病後の身を知らせる文)

御祝儀申上げます。

暮は隨分忙しう御座いました。毎日出かけることがありまして、何もかもうちやらかして、やつと正月を迎へました。こちらは靜かな暖かな元旦です。京はいかゞ。

さむさ御大切に――一月一日夜。

九條武子さんの年賀狀は、ちつとも氣取つたところがなく、實に親しみがあつて、直接に話してゐるやうな感じがして結構なものだ。お友達との手紙はかういふ風にありたいと思ふ。

百舌なく聲もさむう、山莊の秋はもう淋しうなつて參りました。木曜日の御まどゐを夢に見て、

皆々様のお上をなつかしう存じ上げて居ります。熱も下り昨日よりは一室だけ歩いて見ましたが、雲をふむ様な心持でございます。東京へはいつ歸れるともわかりませんので、それのみ心細う存じて居ります。

あたまがつかれて居ります故か、思ふことが歌に出ません。人間はだめなものでございます。先生が御入洛遊ばされたことを知りつゝ、お目にかゝれず残念に存じ上げました。婦人新聞の洛北の秋をお送り下さいまして有りがたうございます。

これもなか〳〵いゝ手紙で、ごく自然でどこにも氣取つたところがない。九條さんの心の落着が知られて好ましい一文である。

下田歌子（依頼の返事）

明日は御來客のよし、さぞ〳〵御多忙御取込みの御事と御察し申上げ候。

右につき椅子、卓御入用の旨、何もうけたまはり、まことに御易けきこと、何とぞ御心おきなく御使ひ下され度候。なほ粗末にてよろしく候はゞ、テーブル掛も持ち合せ候まゝ、後程御人つかはされ候折、一寸否やを御申越しのやう、御まち申上げ候。先づは御返事までかしこ。

下田歌子さんのこの手紙もなか〳〵いゝ手紙で、テーブルを貸してくれといつたときに、テーブル掛も持ち合せてゐる、といつたやうなことは、婦人としてあらまほしき心遣ひでもあり、親切でもある。かういふ心遣ひが婦人の日常の心掛けであり、また手紙を書くときの心掛けではないかと思ふ。

樋口一葉（誕生日の招待）

こと〳〵しう文して御招き申すほどの御馳走もなく候へど、明日は私誕生日に候まゝ、例

年の通り心祝ひの小豆の飯に手料理の粗末なるもの取ならべ、さて充分に遊び申度く、明日一日は赤子にかへらせ貰ひて、私自由を利かせくれ候間、兄こと祕藏の手遊びゐる、昔物にていとをかしきが夥多あるを、平常は大事がりて私などには手も障へさせず候を、御祝ひとしてこれ貸し給へと申すべく、夫れ等御覽に入れたく候間必ず朝より御出で下され度く、御妹様も御一緒にと願上候かしこ。

樋口一葉（暴風の見舞）

昨夜の大嵐いかゞ、お障りもあらせられず候や。漸く雲をさまり、日かげさし出づるを見候て、少し胸靜まる心地に御座候。

さて〳〵近頃におぼえぬ大あれに候ひしかな。我が方は平家の上に地處低く候へば、さしての障りなきに候へど、貴方様は御高臺の御二階造り如何に當て候ひけん。堀垣などの御損所もあらせられずや。危ぶみ思はれ候まゝ御伺ひ申上候。何も書きみだりて、かしこ。

樋口一葉の手紙は、二通ともなだらかな手紙だ。さらりと書き流してあつて、普通の交際の手紙としては上々のものだと思ふ。殊に嵐の手紙は簡潔である。さうして、「堀垣などの御損所もあらせられずや」といふやうに云はれると、どうしてもこの手紙には返事を出さないわけにはいかないやうな氣がするだらう。

奥村五百子（船出する人に）

一筆御祝ひ申納め參らせ候。扨此度は存じよらぬ御目出度き御事にて、實に御嬉しく存じ上げ候。御前様一代の御名譽ならず御子孫迄御名譽一入御目出度く申納め候。嬉しさのあまりに御名もたかく船出し給ふ君なれば、故郷へ錦きて歸り給へ。御伺ひ申上げ度き事も海山に御座候へども、何れ近々御目もじの上、萬々申上度く、先は御よろこび迄、あら〳〵目出度く

かしこ。

奥村五百子の手紙もなか〳〵いゝ手紙だ。しかし、これはいくらか目下の人にやつた手紙である。「御前様一代の御名譽ならず、御子孫迄御名譽一入御目出度く申納め候」といふやうな言葉は、目上の人には書くべきではない。相手の名譽がどうのなどいふことは、目上の人には書くべきではない。目上の人に對しては、たゞ〳〵目出度いと云つておけばいゝのである。

棚橋絢子（晝餉に招かれて）

昨日は暑さ強くて、如何に過さばやと思ふ折柄、お便りありて、今日は晝餉のまうけし侍れば、御子達と諸共に來ませよと、のたまはせらるゝにいと嬉しく、やがて髪あげなどしてまゐるに、時やゝ移りぬれば、あるじまうけのこるところなく、もてなしぶりのねんごろなる、美酒佳肴いへば更なり、師範學校に物したまふまれ人さへありて、あつき氷のうちとけたるものの語らひは、呉竹の世にへだてなき、あるじの御心づかひもおしはかられて、日頃の憂きも忘れはべりつる心せられてなむ。

さけさかなあるじまうけのあつき日もこゝろへだてぬなかぞすゞしき

よろづ對面にこそ、まれ人へよきにつたへたまへや、かしこ。

棚橋絢子さんの手紙は、どうもこれは拵へたやうな感じがして、何か綴り方の模範文として書かれたもの〳〵やうな氣がする。禮の手紙ならば、相手の招待の文句までを書く必要はないのではないだらうか。

長谷川時雨（髪飾りの依頼文）

御美しき御催し心よりよき御思しつきと存じ上げ候。何とぞ御品御製作なされ候節、私の分と妹の分と御としらへ下され候やうお頼み申上げ候。私のことは御存じゆゑよろ

しく御見立て願ひ度く、妹は二十一に相成り候へども若き方にて、束髪にても銀杏がへしにも結びをり候まゝ、思召次第に御つくり下されたく、右あはせて御願申上げ置き候。かしこ。

長谷川時雨さんの依頼文は、私が云つた用事のある文だが、實に簡潔で要領を得てゐる。

節婦　ま　さ（遺書）

（筑前國宗像郡赤間驛の商家の娘、夙く父母を失ひ養父母に育てられ、藩主の館に奉公中、同郡の富豪が倅の嫁にと、無理に養父母を同意せしめた。許嫁の良人長次郎は當時零落してゐた。）

一筆申殘候。我身そもじさまへ言なづけの事は、申すもくどう候へども、此頃おしてかつらへ參れとの事にて、すでに日柄もきはまり、今更かなしさやる方なく、昨日も人して、とゝ

さま、かゝさまへことわけ申上候へども、一圓御聞入なく、却てたのみ候人までかつらへ參るを本意とすゝめられ、そもじさまへそへとの事は申人無之候。夫に付一しほそもじさま御身の上御痛はしく我身ひとり道ならぬ縁を結び身に錦をよそほひ候とも、世の人はさぞかし我身を義理しらずとうとんじ可申候。又此内とゝさまの、そもじさまと不義せしとの御しかり、御尤もなる御疑ひながら、御情に預かり候事は御無座候。只々言なづけの義理にひかれ、又先立ち給ふたがひの親々へ申譯、かれと云ひこれと云ひ、一方ならぬかなしさに、自害をとげ申候。かしこ。

十一月九日

長次郎様へ

ま　さ

この節婦まさの手紙は、これは立派な手紙だ。その事件は小説的だが、しかし、これは決して嘘ではない、つくりものでもない。本當の手紙だらう。それは「却てたのみ候人まで、かつらへ參るを本意とすゝめられ、」といふやうな文章でも分る。父母を説得して貰はうと頼んだ人が、却て父母と會つて、父母の意見が頑强なので、筆者にかつらへ行くやうに勸めるなどは、如何に

も實際ありさうなことで、この手紙が本當だといふことが分る。さうして、「そもじさまへそへとの事は申人無之候。夫に付一しほそもじさま御身の上御痛はしく云々」の言葉は、如何にもやさしい女らしい考へ方で、この、まさといふ人が、どんなに貞節で、而も心優しい女であつたかといふことが分る。

それからまた、そんなに許婚の男の方へ行きたがるのであれば、もう關係があるのではないかと、父から叱られてゐるのも本當らしいし、その父の疑ひは尤もではあるが、しかし、絶對に關係はない、と云ひ切つてあるのも、この書置で身の潔白を證明してゐるわけである。實に、文藝作品にも勝つて、人を動かさずにはおかない手紙である。

しかも、本當に書かれた手紙である。

高　尾（某侯への後朝の文）

けさの御わかれ、なみのうへの御歸路、御やかたの御しゆびいかゞ、御あんじ申候。わすれねばこそおもひ出さず候。かしく。

これは有名な手紙だ。この「なみのうへの御歸路」といふのは、吉原から隅田川を船で歸つたのだ。「わすれねばこそおもひ出さず候」といふ文句は千古の名文である。これは名技巧といふよりも、實感を素直にそのまゝ書き表したところが尊いのだ。手紙は必ずしも長いのがいゝのではなく、この手紙のやうに、一句の中に、千萬無量の思ひを籠めることができれば、最上の手紙だと云つてよい。

瀬川采女の妻（戰場の良人への文）

たよりの舟をよろこび、そゞろに取向ひまゐらせ候。たゆるまもなくなつかしみ思ひ侍る事もおほかめれど、心をあはせかたらふべき人もなければ、ねやさび、ひとりかたしく袖の露、